

忘れられランド

登場人物 マモル

ミノル

稲村 照子 いなむら てるこ

稲村 風子 いなむら ふうこ

稲村 恵 いなむら めぐみ

稲村 ヨネ いなむら  
／  
稲村 稔 いなむら みのる

田之中 ユタカ たのなか

ミドリ

\*挿入歌 唱歌「案山子」

山間にある小さな田んぼ。

初夏の日差しの中、二人の男、マモルとミノルがそれぞれ離れた位置で、無表情に不動の姿勢で突っ立っている。

その間で老女のヨネが、楽しげに唄いながらゆっくりと田んぼの草取りをしている。

ヨネ 山田の中の

一本足の案山子

天気によいのに

蓑笠つけて

朝から晩まで

ただ立ち通し

歩けないのか

山田の案山子

……そうは言ってもね、朝から晩まで立ち通しなんて、なかなかできることじゃない。大したもんだよ。

マモル ありがとうございます。

ヨネ 歩けなくなっただってちゃあんと仕事はしてくれるしなあ。

マモル ご理解いただけ嬉しいです。

ヨネ 今日もこの子たちをしっかりと見守っておくれね。マモルさん。

マモル はい。

ヨネ 病気や台風や虫や鳥やイノシシに負けないように、みんながおいしいおいしいって喜んでくれるお米に育つように、この子たちを助けておくれ。お頼み申しますよ。

マモル はい、がんばります。

ヨネ ミノルも、どうかよろしく。

ミノル ……。

マモル ……お返事。

ミノル ……はい。がんばります。

ヨネ どれ。(稲に)今日も元気に育ってるか？ 草とったから気持ちいいだろ。よしよし、ちゃんと息してるな。きれいな空気入ってよかったなあ。もつと水ほしか？(稲に耳を傾けるようにして)そうかそうか。水は…。(もう一度、稲に耳を傾け)まだいいんだな。よしよし。(顔をあげて)ご機嫌だつてき。

マモル ヨネさんが可愛がついていらっしやるからですよ。

ヨネ ご機嫌ついていやあ昨日、そりゃあ愉快なことがあつてね。

ミノル へえ、なんですか？

ヨネ 出たんだよ、でっかいイノシシが。

ミノル イノシシ？ まだ六月の末ですよ？

マモル 気がつきませんでした。大丈夫でしたか？

ヨネ だもんで投げ飛ばしてやったんだ。

ミノル ヨネさんが？

ヨネ いや大変だった。がっぷり四つに組んだまではよかったけどね。まわしをつけてるわけじゃないから、つかみ所がないんだよ。だけど田んぼ荒されちゃかわないし、こっちも必死でさ、腹のあたりの毛をこうむんずとつかんで、ひとおもいに「とりゃあ！」ってね。

マモル それは大層なご活躍でしたね。

ヨネ 山まで飛んでつたよ、イノシシ。

ミノル 吠え面かいていましたか！

ヨネ 「ひえ〜」って言った。

ミノル 見たかったなあ。

ヨネ 見せたかったよお。

そんなヨネの様子を不審そうに伺いながらミドリが現れる。

それと同時にマモルとミノルは再び無表情に不動の姿勢。

ミドリ ……ヨネさん？

ヨネ あれ、ミドリちゃん。

ミドリ ……なにしてるの？

ヨネ 二人にね、自慢話してた。

ミドリ (マモルとミノルを訝しげに眺めながら) そうですか……。

ヨネ イノシシとの大一番に勝ったもんだから。

ミドリ ……イノシシ……？

ヨネ いやあがんばっちゃったよお。「イノシシなんかに負けるなあ」ってみんな応援してくれるもんでねえ。

ミドリ ……へーえ……。

ヨネ 村の人たちが勢ぞろいしてなあ。

ミドリ ……村の人なんてもう誰も……。

ヨネ そりゃあ賑やかだったよ。お祭りみたいだった。

ミドリ ……ヨネさん、あの、ちよつとあたしといっしょに……。

ヨネ 目が覚めたらだあれもないんでびっくりした。

ミドリ ……。ああ、夢？

ヨネ ? 夢だよ。

ミドリ 病院連れてくところでしたよ……。

ヨネ 楽しかったよ。なつかしい顔にいっぱい会えて。

ミドリ ……そうですか。

ヨネ いい夢みた。

ミドリ そう。

ヨネ ミドリちゃんはまた町からはるばるお散歩かね。

ミドリ ここ、風が気持ちいいから。

ヨネ ひさしぶりだね。仕事、忙しいの？

ミドリ ……クビになっちゃいました。

ヨネ あれえ。

ミドリ 「この店は残飯持たせるのか！」ってお客さんに怒鳴られちゃって。食べ残しの御茶漬け、折り詰めにして渡したら。

ヨネ ……なにを折り詰めにしたって？

ミドリ お茶漬けです。

ヨネ ……お茶漬けかあ……。

ミドリ ……お米がもつたいたいなと思って。たくさん残ってたから。

ヨネ そりゃあ食べ物を粗末にする方が間違ってたんだよ。ミドリちゃんは……ちよつとしか間違つてない。気にしなさんな。……よいしょつと。（と、取り残した草を埋める）

ミドリ ……また雑草と戦ってるんですか。

ヨネ あたしや争い事は好きじゃないんだけどねえ。今日もこうしてたくさん生き埋めにしたよ。泥ん中でこの子たちの栄養になつてもらわにやならんからなあ。

ミドリ 母は強しですね。

ヨネ そうともさ。この子たちのためなら、イノシシにだって負けやしないんだ。

ミドリ ヨネさん、なにか町でほしい物ないですか？ あたし買ってきますけど。

ヨネ （考えて）……ついでの時でいいけど……。

ミドリ なになに？

ヨネ アイスキャンデー。

ミドリ アイスキャンデーね。

ヨネ あれ食べると生き返るんだ。

ミドリ なに味がいいですか？

ヨネ 冷たけりやなんでもいい。

ミドリ わかった。今度買って来ます。

ヨネ それより早く仕事お探しよ。

ミドリ ……ねえ、ヨネさん。

ヨネ ー？

ミドリ ……今年のお盆は……誰か、帰って来る？

ヨネ そりゃあ来るよ。

ミドリ 誰が!?

ヨネ 御先祖様が。

ミドリ ……。じゃあ、また来ます……。

ヨネ 仕事見つかるといいなあ。

ミドリ ……はい。

ヨネ (見送りながら) 元気だすんだよお!

ミドリ、手を振ってからとぼとぼと退場。

ヨネ、ミドリが見えなくなるまで手を振り返す。

ヨネ お嫁さんにでも行ったらいいのに……。 (眩しげに顔を上げ) 今日はお山も

笑つとるよ。お日さん照ってよかったなあ。それじゃマモルさん、ミノル、あと

よろしく。

マモル はい。

ヨネ また明日な。

マモル また明日。

ヨネ、曲がった腰をトントンと叩きながら退場。

ミノル ……なぜいつも僕は呼び捨てなんだろう。

マモル 名前をつけて呼んでいただけだけでもありがたいではないですか。

ミノル お願いの仕方、僕の方は実にあっさりしていました。

マモル きつとお疲れなのですよ。あれほどのご高齢にもかかわらず、一人でお米作りをなさっているのですから。

ミノル ヨネさんは今お幾つですか?

マモル ……そう言えばお幾つでしょう。

ミノル かなりの年代ものでしょうね。どこもかしこも古びているし、あちこちあ

んなにひん曲がっている。修理はなさらないのかな。

マモル 長持ちするのですね。人間の体は。

ミノル なにか秘訣でもあるのでしょうか。……「アイスクャンデー」とやらが怪しいですね。食べると生き返るそうですよ？

マモル ただこの頃のヨネさんは、見る度に小さくおなりです。

マモルとミノル、歌い始める。

小さなヨネさん 小さなヨネさん

カカシはワラで出来ていますが

あなたはなにで出来ていますか

お日さまよりも あたたかく

イノシシよりも 強い愛

田んぼに稲を 植えつけて

カカシに魂 植えつける

小さなヨネさん ありがとう

おかげでぼくらは 人間のように

考えられます 話せもします

尊い毎日 過ごしています

小さなヨネさん また明日

曲がった腰で お運びください

朝から晩まで 山田の中で

ただ立ち通して お待ちしています

二人の歌う間に空は様々に色を変え、やがて強い陽射しと蝉の声。

ミノル いらっしやいませんね……。

マモル ……。もう幾日になりましたよう？

ミノル 雑草がこんなに育つほどです。

マモル ……「また明日な」とおっしやったのに……。

ミノル ……忘れてしまったのでしょうか？

マモル ……ヨネさんが毎日どんなふう稲たちと接していたか、ミノル君は覚えていませんか。

ミノル ……。「今日も元気に育ってるか？」

マモル 「今、草とつてやつからな」

ミノル 「よしよし、ちゃんと息してるな」

マモル 「この子たちのためならイノシシにだって負けやしないんだ」

ミノル ……忘れるなんて……。

マモル ありえません。なにかよほどのことがあったにちがいない。

ミノル なにがあったにせよ、僕たちにはただ立っているしかなすべ術がない。

マモル ですが僕たちは「がんばります」と応えたのです。約束は守らなければ。

ミノル 「がんばります」か……。一体なにをがんばるのでしようね？

マモル 問題はそこです。

ミノル ああ、やはり。

マモル それをただちに考えなければなりません。

ミノル 今からですか。

マモル 今からです。

ミノル ……ぬかりましたね。

マモル ぬかりました……。

ミノル ……。

マモル ……。

ミノル ……やはり僕たちがこれほどぬかってしまったのは、日頃からぬかるみに

足を突っ込んでいることなにかしら……

マモル うまいことを言っていないで考えてください。

ミノル わかりました。(考え出す) がんばる……がんばる……。一体なにを……。

マモル ……ただ、なにをがんばるにしても、そのがんばりに見合った結果が必ずしも得られるとは限りません。ですがそんな時、いくらがんばったからといって、「こんなになんばったのに」とだけは言いたくないものです。

ミノル (考え中) がんばる……がんばり……がんばったのに……。

マモル なぜなら僕たちは、お願いこそされたものの、誰かに「がんばれ」と言われたわけでもなく、自分から「がんばります」と宣言したのですから……。そうは思いませんか？

ミノル (イライラと) 申し訳ありませんが、そういう込み入った話はあとにしてください！

マモル 失礼。お邪魔でしたか。

ミノル 考えろというから考えていたのに「がんばる」という言葉の意味すら見失ってしまいましたよ。混乱のあまり背中がむずがゆくなってきました！(背中を掻こうと手を回す)

マモル ……むずがゆく？

ミノル ああもう！ 体が固くて届かない！ ちよつとあそこの桜の木で背中をこすってきます。(と、歩き出す)

マモル ……ミノル君!?

ミノル ……おや？(身体のあちこちを確認して) おやややや？

マモル ……さりげなくすごいことをやってのけましたね……!!。

ミノル 思いがけずがんばれました！ マモルさんどうぞ！

マモル どうぞと言われても……一体どうやって……。

ミノル まず、僕たちは歩けないという間違っまちがった思いこみを捨ててください。そしてどうしても動き出さねばならないような、高い志こころざしを持つのです。

マモル ……そんなふうにはまったく見えませんでした……。

ミノル とにかく気持ちの問題です。なんらかの強い思いが、マモルさんを人間の

姿に変えてくれるはずですよ。そうだな……たとえばなにか、いても立ってもいられないほど納得しがたいことを思い描くとか。

マモル いても立ってもいられないほど……。

ミノル やってみてください。僕はちよつと町までおりてみます。

マモル ヨネさんを探しにですか？

ミノル アイスクャンデーを見に、です。(行こうとする)

マモル お待ちなさい！ なぜ今アイスクャンデーなんだ！ ミノル君！（と、思わず一歩足を踏み出す）あ……。

ミノル ……やりましたね。

マモル ……僕のために、あえて納得しがたい行いを？

ミノル 半ば本気なかでしたが結果が吉と出てなによりでした。

マモル では早速ヨネさんを探しに行きましょう！

ミノル その前に背中を搔いてもらえませんか。

マモル ……構いませんが……。 (と正面からミノルの背中に腕を回す)

ミノル (搔いてもらい) ああ……！ 最高に気持ちがいいです。

マモルとミノルが抱き合うようにしていると、ミドリが現れる。

ミドリ そこでなにしてるんですか!?

ミノル なにって、ご覧のとおり……。

ミドリ いやらしいことするならよそでやってください！

ミノル いやらしいと言うよりも気持ちのいいことを……。

ミドリ きゃーっ！

ミノル ……！！

マモル ……。

ミドリ 大きい声出しますよ!?

ミノル もう出されましたよね？

マモル 落ちついてください、ミドリさん。

ミドリ ! どうしてあたしの名前……!

マモル あなたのことは、いろいろ伺って存じ上げております。

ミドリ いろいろ?

ミノル 御茶漬の件は、僕もミドリさんは間違っていないと思います。

ミドリ ……誰なんですか、あなたたち……。

マモル 僕たちは、ヨネさんに田んぼを見守るよう頼まれた者でして……。

ミドリ ……お手伝いの方?

マモル ……そんなところです……。

ミドリ、マモルとミノルを疑わしげに眺める。

ミドリ そう言われれば、どこかで見覚えがあるような……。

ミノル とにかくそれほど怪しい者ではありません。

ミドリ ……でもものすごく怪しい人たちに見えたんす。ごめんなさい。

マモル こちらこそまだなにかと不慣れなもので。

ミドリ ……お手伝いを頼むなんて、ヨネさん、もう一人じゃ相当しんどかったのね……。やっぱイノシシがどうか言ってた時、無理にでも病院に連れていけばよかった。いくら丈夫って言っても、もう九十だったんだし。

ミノル ……(マモルに)九十でしたよ。

マモル 信じ難い年数ですね……。

ミドリ ……あたしもまだ信じられません。今日だって、ここに来ればまたヨネさんに会えるような気がして……。

ミノル しかしいくら待ってもおみえにならないのです。

ミドリ ……わかってます……。でも残された田んぼはどうなるんですか? これからずっとあなたたちお二人が守ってくれるんですか?

マモル 僕たちだけでというわけには……。

ミノル それよりも肝心のヨネさんを探さないと。

マモル どちらにいらっしやるかご存知ではないですか?

ミドリ ……亡くなられました……。

マモル ……。

ミノル ……。

ミドリ 稲穂が実るのも待たずになんて、さぞ心残りだったでしょうね。あんなに大事に育てていたのに……。ご家族はここをどうされるんでしょう。どなたかヨネさんの跡を継いでくれるのかしら。……でも、とにかく今年はあなた方が……。

マモルとミノル、固まっている。

ミドリ ……大丈夫ですか？

マモル・ミノル (反応なし)

ミドリ ……あの……しつこいようですけど、本当にお手伝いの方？

マモル・ミノル (反応なし)

ミドリ (気味が悪くなって) ごめんなさい、あたし……これで失礼します……。  
お仕事、がんばってください。

ミドリ、逃げるように退場。

ミノル (正気に戻り) ……マモルさん？

マモル ……気を失っていました……。

ミノル 僕もです。あまりに衝撃が大き過ぎて……。

マモル ……もうお会いできないなんて……。

ミノル アイスクャンデー、間に合わなかったのでしょうか……。

マモル ……ミドリさんはお帰りになったのですか？

ミノル ええ。「がんばってください」とおっしゃっていました。

マモル 益々ががんばらないわけにはいかなくなりましたね。

ミノル なにをがんばればいいのかはいまだ謎のままですが。

マモル それはこれからじっくり考えるところ……。

二人、手を合わせて祈る。

ミノル ヨネさん、どうかゆっくり骨休めなさってください。そして休みながらも僕たちをしつかり見守ってください。お頼み申します。  
マモル ……忘れませんからね。

## 二

ヨネの孫娘たち、照子・風子・恵の三姉妹が歌いながら現れる。

### 三姉妹

それでも人は忘れるけどね

忘れる気もなく忘れるからね

忘れ去られる切なさを

その胸が憶えているくせに

月日が去って

人も去り

あわれ取り残された

忘れられランド

誰かが託した

願いばかりが

育ちつづけている

不思議な場所

八月のお盆。

ヨネの住まいである古い農家にいる三姉妹。

風子は箆笥の中を、恵は棚の中をそれぞれ確認・整理している。

照子は、なにもしていない。

風子 (箆笥の抽斗を覗きこみ) 婆シャツ、婆シャツ、パンツ、靴下、靴下、靴下、腹巻、寝巻き……。

照子 ねえねえ。お味噌汁の具で一番好きなのってなあに？

恵 (棚を整理しながら) ……お豆腐。

照子 お豆腐かあ……。風子は？

風子 (抽斗の中を確認しながらおぎなりに) はまぐり。

照子 はまぐりは普通お吸い物じゃない？

風子 ブラウス、ブラウス……。なにこれ。ちゃんちゃんこ？

照子 ……あたしはね、トマト。食べたことある？ トマトのお味噌汁。この間、取材に行ったお店で食べさせてもらったんだけどさ、おいしいんだよ。冷やしてもおいしいの。お味噌とトマトの酸味が絶妙なハーモニーを奏でてるっていうのかなあ。今度うちでも作ろうね。あ、湯剥きして入れるのね。そうしないと皮がさ、こうキュルキュルってこよりみたいになって、うっかり食べると「なにこれ！こより!」ってなっちゃうから。湯剥きって面白いよね。きれーに剥けるもんね。あれ、ミニトマトでもできるのかな。やったことある？ ミニトマトの湯剥き。

風子と恵、黙々と作業を続ける。

照子 ……。めんどくさいか。ミニトマトってミニだもんね。じゃあさ、果物の中では何が一番好き？

恵 ……メロン。

照子 メロンね。そう言えば最近、プリンスメロンで見ないよね。昔はさ、メロンと言えばあの小ぶりでするんとしたやつって決まってる、網網のついてるのなんてめったに食べられなかったじゃない？ 近頃は網網ついてても安いよね。あ、

アンデスメロンのアンデスって「安心です」の略なんだってよ？ 知ってた？

恵 知らなかった。

風子 (恵とほぼ同時に) 知ってた。

照子 ……あたしはビワかなあ。旬が短いんだよねえ。淡くい味でさ、後味がなんにも残らないの。そういう刹那的のところがまたいいんだけどね。でもあんなに淡泊なくせして皮剥いた指っていか爪がまつ茶色になるんだよ。あれ、なんで？

風子と恵、黙々と作業を続けている。

照子 風子は？ 果物でなにが好き？

風子 栗。

照子 え！ 栗!?! 栗って果物？ ねえ恵、栗って果物だっけ？

恵 知らない。

照子 ちがうんじゃないかなあ、栗は。

風子 じゃあナシ。

照子 え？ それってどっち？ 果物の梨？ それとも栗が果物じゃないなら好きなものナシってこと？

風子 (抽斗の中を探りながら) ズボン、ズボン、モンペ、モンペ、モンペ。

照子 ……じゃあさじゃあさ。

恵 照ちゃん！ 少しは働いてよ。

照子 もし明日死んじゃうとしたら今日一日でなにをする？

恵 あたしが照ちゃんだったらまずあの竜巻が通ったあとみたいな自分の部屋を片付けるけど。

風子 (さらに別の段) なんかわかんないヒモ、ヒモ、ヒモがいっぱい、割烹着、雨合羽、毛糸の帽子……。

照子 片付けなんてこうやって残された家族がやってくれるでしょ？

恵 だったら絶対にあたしより早く死なないでよね。

風子 ……すごい！ 感動した！ こんなにくすんだ色で統一されたワードローブ

初めて見た！

照子 あたしはねえ、みんなにお別れの挨拶しに行くな。「明日からいなくなります。さよなら」って。片付けなんかよりよっぽどすつきりすると思わない？

恵 そうかもしれないけど、実際はいつ死ぬかなんてわからないんだから……。

照子 そうだよね。おばあちゃんみたいに、ある日突然お迎えが来ることだってあるもんね……。と言うことはさ……。

風子 （抽斗を閉め）欲しい物まったくなし！

照子 （ふと、気持ちよさそうに顔を上げ）ああ、田んぼからいい風が来るねえ。

風子 指輪や宝石の類たぐいもまったくなし！

照子 そんなものあるわけないじゃん。

風子 だってこんな田舎までわざわざ足を運んでるのよ？ お姉ちゃんやメグちゃんみたいな自由業とちがって、あたしは貴重なお盆休みを潰してるんだから。

恵 （照子に）それで？ と言うことはなに？

照子 ー？ ああ、つまりさ、いつ死ぬかわからないってことは、毎日が最後の日かもしれないってことでしょ？ だから恵もね、「明日にはお姉ちゃんと会えなくなるかも」って毎日思ってた方がいいよ？ そうすれば「片付けなさい」なんて些細なことは言いたくなくなるから。

恵 わかったから片付けなさい！

風子 ねえ、どうする？ めぼしい物ないからもう引き上げる？

恵 ……風ちゃん……それは完全に泥棒の言い草だよ。

風子 だって形見分けしに来たんでしょ？

恵 遺品の整理に来たの！ それからこの家どうするかも……。

風子 あら、なつかしい。（と、棚の写真立てを手に取り）見て。七五三の写真。

照子 （覗き込んで）うわ、恵、ちっちゃい！

風子 やだ、お姉ちゃん前歯ないじゃない。

照子 風子の顔、ぱんぱんだね。

風子 そう言えばあたし、この頃のあだ名「風船」だった。

恵 ……今日が人生最後の日だとしても、そうやって自由に生きるんだね、お姉ち

やんたちは……。

そこへ庭先からミドリが恐る恐る顔を出す。

ミドリ ……ごめんください。

風子 はい？

恵 あ！

ミドリ 下に車が止まってるの見たから、もしかして、と思つて。ごめんなさい、忙しいところ……。

恵 どうぞどうぞお上がりください。

風子 なくんにもありませんけど。

ミドリ それじゃ、それじゃほんとにちよつとだけ。(と上がる)

恵 その節は本当にありがとうございました。

ミドリ ううん、あたしなんてなんにも。

照子 でも連絡もらわなかったら、あたしたちおばあちゃん亡くなつたつて知らないままだったよね。

ミドリ あの日はほんとにたまたま。お届けものに寄つたら、ヨネさんが長靴履こうとしたままの格好で倒れてて。

風子 びっくりしたでしょうね、おばあちゃんも。田んぼに出るつもりがいきなり三途の川渡るはめになつて。

照子 でも長靴履いて渡れたからね。

恵 ちよつと照ちゃん！ なに自分だけ座布団敷いてるの!?(と慌てて抜き取り、裏返してミドリに勧め) すみません、どうぞ。今、お茶を……。 (と茶箆筒へ)

ミドリ ああ、気を遣わないで。

照子 そう言えばなんの御礼もしてませんでしたよね。すいません。

ミドリ そんなそんな。あたしこそごめんなさい、お葬式にも伺わないで。

照子 あたしたちだけですませちゃったんですよ。他に身内もないし、ご近所さんて言ってもこの辺り……。

ミドリ そうなの。もうこの村、誰も住んでないの。昔とずいぶん変わっちゃったでしょう？

風子 （お茶の支度をしている恵に）メグちゃん、この暑さだからなにか冷たいものを、

恵 （手をとめ）あ、そうか！

風子 飲みたいんだけど、あたしは。

恵 自分でやって！

照子 お茶買って来たでしょ？ 大きいやつ。

風子 そうだ。冷蔵庫？

照子 さっきラッパ飲みしたけど。

ミドリ いいの！ かまわないで。あたしお邪魔でしょう？ ごめんなさい。もう帰るわね。

恵 いえそんな、せめてお茶の一杯くらい。

ミドリ ……恵ちゃん、すっかり大人になっちゃったわねえ。

恵 は？

ミドリ この間、霊安室で会った時わからなかった。大きくなって、すごく堂々としてたから。

恵 ……堂々としてたつもりはないんですけどね。場所が場所ですし。

ミドリ 照子ちゃんも風子ちゃんも、立派になって。

間。

ミドリ ……ごめんなさい！ ちょっと慣れ慣れしかったわよね。つい懐かしくて……あ！ でもあなたたちが覚えてるわけないの！ だってあたし、見てただけだから。毎年夏になると、ヨネさんのおうちにあなたたち家族で来てたでしょ？ いつもにぎやかで楽しそうだなって……。

風子 おとなり……だったんですよね？

ミドリ ……ええ。あの頃は……。

照子 声かけてくれればよかったのに。

ミドリ そうしたい気持ちはあったんだけど……でもほら、あなたたち、いつからか急に来なくなっちゃったし……。

間。

恵 ……まあ、ウチもいろいろありまして……。

ミドリ (うろたえて) あ、そうよね、そりゃあいろいろ家庭の事情ってあるわよね。ごめんなさい、あの……今日は、お父様は……？

恵 ……おばあちゃん、なんにも言ってますでした？

ミドリ ……え？

風子 やつぱりなかなか言えないわよね、息子が蒸発したなんて。

恵 ……風ちゃんはあっさり言えてるね……。

ミドリ ……蒸発って……どこに？

恵 ……それがわかれば蒸発とは言わないんですけど……。

風子 おとなしくサラリーマンやってればよかったのに、自分で商売始めようなんて思ったのがそもそもの間違いなのよ。失敗するに決まってるじゃない。もともとは百姓の出なんだし。

恵 ……とまあそんな具合で、借金抱えていなくなっちゃいまして……。もう二十年近くになりますけど……。

風子 お母さんだつてあんなに苦労しなければもう少し長生きできたと思うけど。

ミドリ ……ごめんなさい、なんにも知らなくて……。あたし……どうすればいいかしら……。

恵 ……どうもしなくていいですよ？

照子 (立ちあがり) ミドリさん、冷たいお茶飲まない？

ミドリ いらぬいらぬ！ あ！ ラツパ飲み of せいじゃないのよ？ ほんとにもう行かなきゃ。ごめんなさい、すぐ帰るって言ったくせに。

恵 本当にありがとうございます。今度改めてお礼を……。

ミドリ いいの、お礼なんて。でもまたこっちに来るようなことがあったら、よかつたら連絡してね。

風子 ああ、でもこの家、売っちゃうつもりなんですよ。

ミドリ ……そうなの？

恵 風ちゃん、それはまだこれから……。

照子 買う人なんているかねえ。

風子 探せばいるわよ。そうだ、ミドリさんもおばあちゃんの形見になにか持っていつてください。(と箆笥の引出しを開け) モンペとか履きませんか？

ミドリ 履かないけどありがとう。でも形見いただけるようなことしてないから……。ごめんなさい。お邪魔しました……。

ミドリ、魂を抜かれたようにふらふらと帰って行く。

風子 ……何回「ごめんなさい」って言った？

照子 ……「おとなりのミドリさん」ねえ……。

恵 照ちゃん、なにか少しくらい覚えてないの？

照子 となりは年寄り夫婦だけじゃなかったかなあ。(と台所へ)

風子 開けたついでにもう一回見てみよう。着物の一枚くらいどっかに隠れてるかもしれないから。(と抽斗の中を探り出す)

そこへマモルとミノルが現れる。

マモル 本当だ。どなたかいらしてる。

ミノル 待つていた甲斐がありましたね。ヨネさんが言っていた通りですよ。お盆になつてようやく来てくれたんです。

恵 (二人に気づき) あの、なにか？

ミノル ……ご先祖様ですね？

恵 ……は？

マモル (風子に) ……なにをなさっているんです？

風子 家捜しやさがですけど。

ミノル え？ 泥棒？

照子 (ペットボトルを手に戻ってきて) ……誰？

ミドリ (戻ってきて) ごめんなさい。肝心なこと言い忘れちゃって。(マモルたちに気づき、やや警戒する) ……いらしてたんですか。

風子 ミドリさんのお知り合い？

ミドリ あたしじゃなくてヨネさんの…えっと…。(マモルたちに) ごめんなさい、お名前、ど忘れちゃった…。

マモル お教えしておりません。

ミドリ そうでしたっけ…。

マモル 名前は、マモル…。(思いつきで) 山田です…。

ミノル (マモルに倣って) ミノル山田です。

風子 日系の方？

ミドリ ……あなた……ミノルさんなの？

ミノル ……そのつもりでしたが……なにか？

ミドリ いえ…。(姉妹たちに) ヨネさんに、田んぼのこと頼まれたって、ご本人たちはおっしゃってるんだけど…。

恵 それはどうもお世話になってます。

マモル ……ひよつとして、恵さん、ですか？

恵 ……そうです…。

ミノル では、そちらが照子さんに風子さん？

ミドリ なんだか……なんでもよくご存じみたいで…。

マモル ヨネさんからみなさんのお話は度々伺っております。

ミノル お孫さんたちが来てくださるとは思いませんでした。もっと小さな女の子たちを想像していたもので。

恵 最後におばあちゃんと会ったの、小学生の時ですからね。

ミノル みなさんご立派にお育ちで。

風子 もうこの辺で育つのはやめたいくらいですけど。

照子 (ミドリに) それで、肝心なことって？

ミドリ ……ああ、冷凍庫にね、アイスキャンディー入れたままだから食べてもらおうと思って。たくさんあってもつたいないから……

ミノル では草取りの後にみんなでありがたくいただきましたきましよう！

恵 草取り……？

ミノル いやあ、僕こんなに大勢の人を見るの初めてですよ。

照子 (ミドリに) この辺の人？

ミドリ さあ……。

風子 おばあちゃんとはどういったご関係だったんですか？

マモル ……(悲しみが甦り) 本当に惜しい方を亡くしました。みなさんもお力落としのことでしょう。

恵 ……お二人は、ご兄弟……？

ミノル 僕の方が若干新しいですね。

恵 ……。あの、いつ頃から田んぼのお手伝いを……？

マモル これから精一杯お手伝いいたします。

風子 んくさすが日系人。なかなか会話が通じないわね。

マモル では早速参りましょう。

恵 ……参るってどこへ？

ミノル 田んぼに決まっているではありませんか！

間。

照子 (いつの間にかまたラップ飲みしていたペットボトルのフタを閉めながら) とにかくあがってもらったら？

恵 ……あたたかいお茶でもいかがですか？

マモル ……結構です。お話もここで。

ミドリ あ、それじゃあ、あたしはこれで。(一同を気にしながらも足早に去る)

ミノル みなさん、稲作のご経験はおありですか？

風子 いいえ、まったく。

ミノル では草取りの際にこれだけご注意ください。今、田んぼで猛威をふるっているのは主に稗ひえですが、これは稲と非常に非常によく似ています。稲のフリを  
しているわけです。田んぼでの生き残りを賭けて敵も必死ですが、このようなあ  
ざとい罫にはまって肝心の稲を引っこ抜いたりすることのないようくれぐれもお  
願いたします。それから……

風子 先に進まれてもわからないんですけど。なにを言われているのかさっぱり。

ミノル ですから稗と稲は……。

風子 そっくりなんでしょ？ それはもうわかった。

照子 そのそっくりはどうやって見分けるの？

ミノル 稲はですね、葉っぱの付け根の茎の部分に……。

恵 ちょっと待ってください。あの、田んぼは山田さんたちが見てくださいっている  
んじゃないんですか？

マモル ……見ては……います。

照子 見てるだけ？

風子 なあに？ 要するにお金の話？

ミノル お金？

風子 おばあちゃんはおなた方を雇っていた。でも死んじゃったから支払いが滞とま  
ってる。お金が出ないなら作業する義務はない。そういうこと？

照子 じゃあ生まれ変わるとしたら何になりたい？

恵 なんで今!？

照子 なんか生臭い話になってるから。

風子 スーパーモデル。

恵 答えるんだ……。

マモル お金はいただいておりません。第一、僕たちには必要がない。

風子 お金に苦勞のない人のセリフね。本来のお仕事はなにを？

マモル ……。ガードマンです……。

風子 ……ご結婚は？

マモル ……考えたこともありません。

風子 嫌いなものは？

マモル 雀です。

恵 なに訊いてるの？

風子 大事なことよ。

照子 じゃあ好きな食べ物は？

ミノル 僕は噂のアイスクャンデーというものを是非一度……。

恵 話を整理させてください！

マモル ……願ってもないことです。

恵 さつきから伺っていると、山田さんたちはあたたしたちが、おばあちゃんの田んぼを引き継いで世話するようにお考えみたいですけど……。

風子 それは無理！

マモル 難しいことはなにもありません。まずはあの雑草さえ取ってしまえば……。

風子 どうしてあたたしたちがそんなことしなきゃいけないの？ おばあちゃんから

頼まれたのはあなたたちなんですよ？

ミノル そうです。「がんばります」と言ってしまったのです。

風子 だったらご面倒でも、お二人だけでがんばってください。本当はがんばってくれなくてもいいんですけどね。ここ、売っちゃうつもりだし。

マモル ……売る？

恵 まだ相談中なんですけど……。

風子 だから田んぼがどうこう言われても困るんですよ。困るっていうのはつまり迷惑ってことなの。

ミノル 迷惑？ お米ができることが？ ええ！？ そんな人間がこの日本に存在するんですか？

照子 ……驚きすぎじゃない？

マモル 僕も驚きを隠せません……。ヨネさんの作ったお米を食べてこんなに大きくなったみなさんが、そんなふうにお考えとは……。

恵 確かにおばあちゃんには毎年お米を送ってもらいましたけど。

照子 新米の時ってさ、おかずなににするかでもめるんだよね。

マモル そうやって、あなたたちは食べるではありませんか。毎日毎日何回も。食べなければ生きていけない、そうでしょう？

風子 人をものすごい食いしん坊みたいに言わないでくれる？

マモル この先どうなさるんですか。お米も作らず、田んぼまで手放して。

照子 一生懸命働かなくちゃね。食べものを買うために。

風子 お姉ちゃんなんて毎日遊んでるみたいなものじゃない。

照子 逆逆。フリーの物書きにはね、休みなんかあつてないようなものなの。

ミノル では思いきって農業に転職なさっては？

照子 体を動かすのは得意じゃないんだよねえ。

風子 横の物を縦にもできないものね。

恵 (マモルたちに) あの、まだここ売って決めたわけじゃないし、無責任な言い方ですけど、もしよかったら、このまま田んぼ続けていただけませんか？ そうしてくれたら亡くなったおばあちゃんも喜びますから。あ、もちろん獲れたお米は山田さんたちのものということだ。

照子 全部？

恵 当然でしょ？

ミノル それは困ります！

風子 現物支給じゃ不満なの？ お金には困ってないんでしょ？

ミノル だって支給されても僕たちは……。

風子 そうだ！ じゃあこの家と土地、あなたたちが買ってくれませんか？ そうすればもうあたしたちのことなんて気にせず、思う存分お米作りでもなんでもできるでしょ？

ミノル …… (マモルに) この人たちは本当にヨネさんと血がつながっているのでしょうか？

マモル ……先ほどの、生まれ変わるとしたら、というご質問ですが。

照子 あ。答えてくれるんだ。

マモル 田んぼでヨネさんをずっと見てきて、僕は何度もあの稲たちをうらやましいと思いました。あれほど手をかけられて、心配されて、無事に大きく実ったあとは、大事に育ててくれた人の命をつなぐという恩返しができる。

照子 だから次回は是非ともお米に生まれて来たいと。

マモル そう思っていました。ついさつきまでは。(ミノルに) 行きましょう。

ミノル はい……？

マモル 僕たちだけでがんばりましょう。

恵 あの、納屋の鍵、開けておきますから、なにか必要な道具があつたらなんでも自由に使ってくださいね。どうぞよろしくお願いします。

ミノル (マモルに) 「がんばります」と言っておきますか？ お願いされてしまいました。

マモル (姉妹たちに) 収穫は九月の下旬です。天日干しのあと十月には新米としてお渡し出来ますので、必ずとりにいらしてください。

照子 あれ、気前がいい。

恵 いただけませんよ！ それはいけません。

風子 素直に受取ってくればいいじゃない。それでこっちの気もすむんだから。

ミノル しかし僕たちがごはんをいただくわけにはいきませんから……。

風子 どうして？ 日系人だから？

マモル あれはあなた方のために植えられた稲だからです。ヨネさんはもうご商売のお米作りはなさっていませんでした。あの小さな田んぼを残されたのは、ご自分とご家族が食べていくのに困らないよう……

風子 別に食えることになんか困ってないし、イヤイヤならやってくれなくてもいいんですよ？ こっちは誰も頼んでるわけじゃないんだから。

恵 あたしさつき頼んじゃった……。

マモル ヨネさんとのお約束は守ります。ご安心ください。

風子 そういうのを日本では「恩着せがましい」って言うのよ！

ミドリ もうやめてください！

と、ミドリが駆け込んで来る。

ミドリ 全部あたしがいけないの！ あたしが至らないばかりに……。

照子 ……ミドリさん、帰ったんじゃないの？

ミドリ ……あたし、よく知りもしないで山田さんたちのこと紹介しちゃったけど、なにか揉め事でも起こったらと思うと帰るに帰れなくて……。

風子 「あたしがいけない」ってなにが？

ミドリ あたしがもつとヨネさんのこと気遣っていれば、こんなことには……。

風子 ……（照子に）意味わかった？

照子 「風が吹けば桶屋が儲かる」理由と同じくらいわからない。

ミドリ だってこれって遺産問題でしょ？ あたしの注意が足りないせいでヨネさんが亡くなったから……だから起きてる問題でしょ？

恵 ミドリさんのせいじゃありませんよ。だっておばあちゃん、もう九十だったんですよ？

ミドリ だけど、世界には百歳以上のお年寄りが二十万人もいるって……。

風子 せめて日本の統計を使えばいいのに。

照子 責任を感じてくれるところ悪いですけど、この件はミドリさんにはまったく関係……

ミドリ そんなことない！ だってヨネさんの一番近くにいたのはあたしだもの。どうしてもっと早く気がつかないんだろう。あたしっいたらいつもいつも、ぼんやり見てるばかりで……。田んぼのことだって、アイスクャンデー買いに行くヒマがあったら手伝えればよかったのに……。お米作りはあたしがやります。そうでなきや申し訳がたたないもの。お願いします！ あたしにやらせてください！

間。

ミノル ……マモルさん。

マモル ……はい？

ミノル 僕、アイスクャンデー見てきてもいいですか？

暗転

### 三

前場から数日後の休日。

ヨネの家。茶の間にいる照子とマモル。

照子 (写真立てを手に) では問題です。この七五三の写真には、一ヶ所おかしいところがあります。それはどこでしょう？

マモル ……わかりません。

照子 ヒントほしい？

マモル あの……。

照子 私たち三姉妹は、それぞれ二つずつ歳が離れています。

マモル ……。

照子 じゃ第二ヒントね。女の子のお祝いは三歳と七歳の時だけです。ああこれもうほとんど答えだよ？

マモル 照…子さん……。

照子 降参かあ。正解はね、五歳の風子が晴れ着を着てるところ。「あたしも着物着る！」って騒いで大変だったの。家中の壁に「キモノキモノ」ってクレヨンで書きまくっちゃって。

マモル ……今日は風子さんはおみえにならないのですか？

照子 なんか人と会う用事があるんだって。

マモル ……それで、お話とはなんでしょう？

照子 うん。どうですか？ この家の住み心地は。

マモル 申し分ありません。僕たちにはもったいないくらいです。

照子 古くてなにかと不便だけどね。

マモル とんでもない。素晴らしいお宅ですよ。なにしろ屋根がついています。

照子 ……たいていの家についてるんじゃない？ 屋根は。

マモル 雨が降っても濡れずにすみませうから。

照子 ……ずっと宿なしの生活なの？

マモル 冬場は納屋をお借りしていました。母屋を使わせていただけるなんて心苦しいです。

照子 どうせ空家なんかも。田んぼ見るついでに留守番してもらえばこっちも安心だし。それにほら、家は人が住まないと傷むっていうでしょ？

マモル ……人ではないものが住んだ場合はどうなるのでしょうか？

照子 ……「人ではないもの」って、なに？

マモル ……例えば……。

照子 怖い話？

マモル ……怖い話ではありませんが、いささか面倒な話かもしれません。

照子 どっちにしてもやめてくれる？

マモル はい。では、照子さんのお話をどうぞ。

照子 あたしの話？

マモル 「ちよつと話が」っておっしゃいましたよね？

照子 うん。言った。だからしてるじゃない。こうしてちよつとお話を。

マモル ……間違っていたらすみません。

照子 いいよ。なに？

マモル 草取りサボりたいだけですか？

照子 お兄さんもサボりたいのかと思って。

マモル は？

照子 なんだかボーっと突っ立って、みんなのこと眺めてる時間の方が長いから。マモル ……気をつけます。つい習慣で。

照子 ああ、本職ガードマンだっけ。

マモル まさか僕を休ませるためのお誘いとは思いませんでした。細やかな

お気遣いありがとうございます。

照子 いえいえ、とんだ思い違いだったようで。

マモル 誤解も解けたところで仕事に戻りましょうか。

照子 丁重にお断りいたします。

マモル ……どうしてですか？

照子 体を動かすのは好きじゃないんだってば。

マモル ……でも照子さん、楽しそうに作業なさっていたではないですか。歌まで

お歌いになって。

照子 あれは憂さを晴らしてたの。

照子、歌う。

草取り娘にはなれない

そもそもそんな娘にはなりたくもない

陽射しは暑い 足腰は痛い

虫にはあちこち刺され放題

それでもひたすらうつむき通し

気が沈む 顔がむくむ

嗚呼 なにが悲しくてこんなこと

草取り娘にはなれない

そもそもそんな娘にはなりたくもない

草取り娘にはなれない

そもそも娘と呼ばれる歳でもない

マモル そう言えば、ヨネさんもよく楽しそうに歌っていらした。

照子 やってられないでしょう、あんな重労働。せめて歌でも歌わなきゃ。

そこへミノルとへろへろの恵がやってくる。

ミノル 休憩です。「川の向こうにきれいなお花畑のある幻覚が見え始めた」と恵さんがおっしゃるので。

恵 ……（照子に）やっぱりサボってる！

ミノル いやあ、体を動かすというのは実に気持ちがいいものですね。労働のあとのアイスキャンデーがまた格別です。恵さんはなに色になさいますか？

恵 結構です。ちよつと休ませて……。もう今死にそうだから……。

ミノル 食べれば生き返りますよ？

照子 弟さん、タフだねえ。汗もろくにかいてない。

ミノル おかげさまで全天候型の丈夫な作りになっているのです。照子さんはアイスキャンデーいかがですか？ 僕は空色のものをいただきますが。

照子 空色ってソーダ味？

ミノル 味のことはよくわかりませんが、とにかく冷たくて最高です。

照子 あたしはいいや。どうぞ何色でも召し上がれ。

ミノル ではお言葉に甘えて。（と、台所へ。あとについてきたマモルに）マモルさんは夕焼け色を試されてみては？

マモル いえ、僕は……。

ミノルとマモル、台所へ姿を消す。

照子 ……なんか変わってるよね、あの兄弟。熱心なこと言うわりにはあんまり働かないし。

恵 そうね……。

照子 兄さんは微笑みながら人のことじつと見てるし、弟の方だって、なにかと言えば立ち上がっておしゃべりばかりしてるじゃない。

恵 ……確かにちよつと変わってるけど、悪い人たちじゃないよ。

照子 悪い人たちじゃないけど、ちよつと変わってるよ？

恵 マモルさんなんてすごく真面目ない人じゃない。

照子 恵は礼儀正しい真面目な男の人に弱いもんね。

恵 ……だって、なにも言わずにいなくなってそれっきりなんて人は困るでしょ。

照子 ……。

恵 ……あー疲れた。あの歳でこんなことやってたなんて、おばあちゃん尊敬しちゃう。

照子 体力もないお針子さんのくせに「あたしたちも一緒にやります！」なんて優等生ぶるからだよ。

恵 だっていくら近くにいて責任感じるって言っても、ミドリさんは赤の他人なんだよ？ ずっとおばあちゃんのことほったらかしといたあたしたちが「それじゃあどうぞよろしく、ご勝手に」なんて言える？

照子 風子なら言えるでしょ。

恵 ……そうだね。

照子 で、言い出しっぺのミドリさんが来てないのはなんで？

恵 あたしに訊かないで。

マモル （おしぼりを作ってきて恵に差しだし）どうぞ。

恵 あ、ありがとうございます。

マモル あの雑草さえ取ってしまえば、あとは収穫までほとんど作業はありませんから。

照子 じゃあ山田兄弟もヒマになるね。

マモル ……いいえ。ここからが正念場です。台風が来るかもしれませんし、なにより雀の襲来には気が抜けません。

照子 雀がちよつとつつかくくらいは大目に見てやったら？

マモル 大目に見るなんてとんでもない！ あの小さく丸っこい体とつぶらな瞳にだまされてはいけません。奴らは<sup>もみ</sup>籾の中でお米の栄養となるミルク状のものが一番おいしく甘くなる時期を熟知しています。チュンチュンとかわいい声で鳴きな

がら、お米の赤ちゃんからミルクを横取りする破廉恥はれんちな大悪党どもなんですよ！

恵 ……ほんとうに雀が嫌いなんですわね。

ミノル (アイスの棒だけくわえて飛び出してきて) 雀!? 雀が来たんですか？

恵 ご兄弟そろって……。

照子 そしたらカカシ作ろうか？

間。

ミノル ……カカシは……特に必要ないのでは……。

照子 でも雀を追っ払うんでしょ？

マモル 僕たちで充分間にあうかと。

照子 えー作ろうよー！。

恵 カカシなんか立ててもあんまり効果ないんじゃないの？

ミノル 恵さん！ では僕たちは一体なんのために生きているんですか！

恵 ……それ、今考えなきゃダメですか？

そこへ風子が、きちんとした身なりの男・田之中を伴って現れる。

風子 ここなんですよ。もう古くてみすぼらしい家ですけど。

田之中 なかなか風情があるじゃありませんか。

恵 風ちゃん！

風子 なによ、二人ともその薄汚れた格好！ (田之中に) 姉と妹です。今日は朝から田んぼの草むしりだなんて張りきっちゃって。

田之中 お若いのに感心ですわね。

風子 若いって言ってもみんな三十を超えてる上に、もれなくシングルなんですよ？

田之中 (家を眺めてぽつりと) ここは残ったんだ……。

風子 もれなくシングルなんですよ？

田之中 ……聞こえていますか。

恵 風ちゃん、そちらは……。

田之中 田之中と申します。はじめまして。

風子 この前うちの会社でね、「ねえ、誰か田舎の家と田んぼ買ってくれる人いる？」って訊きまわったら、専務がゴルフ仲間の田之中さん紹介してくれて。

恵 専務にもそんな口のきき方するの？。

田之中 お話を伺ってるうちに是非とも実際に拝見したくなりまして。急だったんですが無理をお願いして連れて来ていただきました。

風子 あたし左ハンドルの車に乗せてもらったの初めて。

照子 お金持ちなんだ。

風子 だって社長さんよ？ 社長さん！

田之中 裸一貫から始めたレストラン・チェーンの経営がなんとか軌道に乗ったものですから。少しのんびりできる時間と場所を持つとうかと思ひまして。

マモル ……ここにお住まいになるのですか？

田之中 ……。(しげしげと二人の山田を眺める)

風子 (田之中に) あ、こちらはマモル山田さん、ミノル山田さんという日系人のご兄弟で、今、田んぼとこの家を管理してもらってるんです。

田之中 ……山田さん……。

ミノル ……山田です……。

田之中 田之中です。どうぞよろしく。(と名刺を渡す)

恵 (小声で) 風ちゃん！ ちょっと。

風子 なあに？

恵 いいからちよつと！

風子 なによ、もう。すいませんけど山田さんたち、田之中さんにそこら辺案内してさしあげて？ (田之中に) ちょっと失礼しまーす。(と家の中へ)

恵 どういうこと？。

風子 どういうことって…… (照子に) お姉ちゃん、なんか顔むくんでない？

三姉妹は部屋のすみにひとかたまりになって話し始める。

マモル ……とりあえず、田んぼをひと周りなさいますか？

田之中 （姉妹たちの方を気にしながら） そうだなあ……。

恵 一人で勝手なことするの？

風子 だって田之中さん、独身なのよ？

恵 それ答えになってる？

風子 もしあたしたちの誰かが田之中さんと結婚するようなことにでもなれば、またここはあたしたちのものになるじゃない。

照子 すごいなあ風子は。いろんな計算ができて。

田之中 ……立ち聞きするか。

マモル は!?

田之中、「しっ」と人差し指をたてると、物影に張りついて隠れ、姉妹たちの様子を伺う。

マモルとミノルもなんとなく田之中と同じポーズで後続く。

恵 ここを売る売らないって話はさ、今棚上げになってるはずでしょ？

風子 ええ！ そうなの？ いつから？

恵 だって状況が変わったじゃない。田んぼやることになったんだし。

風子 お米ができるまでの話でしょ？ 秋まで待つてもらえばすむだけのことよ。

照子 恵はね、山田兄あにが気に入っちゃったんだって。

恵 そんなこと言ってないでしょ！

風子 それはそれで個人的にお付き合いすればいいじゃない。ここを手放すことと  
なんの関係があるの？

照子 やっぱりこのどかな自然の中で愛を育はぐみたいんじゃないの？

風子 お米じゃあるまいし、自然の力を借りないと育たない愛なんてニセモノよ？

メグちゃん。

恵 愛なんて育てる気ないの、全然！

風子 そんなこと言ってるから彼氏が出来ないんでしょう？

恵 風ちゃんに言われたくないよ。

風子 あたしは育てる気なら存分にあるのよ。どこからも芽が出てこないだけで。

照子 のど渴いたな。麦茶飲まない？

恵 ……飲む。(と台所へ)

風子 今日はラッパ飲みしてないでしょうね？

照子 いいじゃん、姉妹きょうだいなんだからー。(と台所へ)

風子 してるの!?(と照子に続く)

ミノル ……すごいこと聞いちゃいましたね？ 恵さん……本当でしょうか？

マモル ……あまり気分のいいものではありませんね。

ミノル そうですか？ 僕だったら悪い気はしませんが。

マモル 立ち聞きのことです。

ミノル ああ、そっち……。

田之中 でも今まで散々やってきたろう。

ミノル ……今まで……？

田之中 田んぼに立ってた時、いろんな人の話聞いてたろ？ それはまさに「立ち聞き」じゃないか。

間。

マモル (ミノルに) 今日、ミドリさんはどうなさったんでしょうか？

ミノル そう言えばどうしたんでしょうね？

田之中 なぜ話題を逸らす。

マモル 危うく気を失いそうになったので、まったく別のことを考えてみました。

田之中 おまえたち、なんて苗字だっけ。山田？ 芸がないなあ。もっとひねりを

効かせなきゃ。たとえばオレみたいにさ。

ミノル 田之中だって似たようなものじゃないですか。

田之中 田中にしないとところがひと味違うんだよ。いやしかし、ここにもまだおま  
えらみたいなのが残ってたとはねえ。

マモル ……この村にいらしたことが？

田之中 想像はしてたけど、ひどいもんだなあ。昔はここら辺ゼーんぶ田んぼだっ  
たのに、オレが立ってたとこなんてただの荒地になっちゃってるよ。

ミノル ……。(もらった名刺をしげしげと眺める)

田之中 書いてるわけないだろ、カカシだなんて。

ミノル 僕、文字は読めませんから。

田之中 だったら見ても無駄だろう。(ふと)なあ、さっき「ミドリ」がどうとかっ  
て言った？

ミノル ……田之中さん、カカシだったんですか？

田之中 ここにいるのか？

ミノル 急に態度が大きくなったのは僕たちが仲間だから？

田之中 質問に質問で返すな！ ここにいるのかって聞いてんだ！

マモル あなたのおっしゃる「ミドリさん」と同じ方かどうかは……。

田之中 なんかしよっちゅう謝ってばかりで、悪いことは全部自分のせいだと思  
いこんで、いつもオドオドして雀ごときにも小バカにされそうな……。

ミノル ああ、それならきつとご当人です。

そこへミドリが息せき切って現れる。

ミドリ ごめんなさい！ 遅くなりました！

その声に三姉妹が台所から戻って来る。

照子 今日はもう来ないのかと思った。

ミドリ ごめんね、本当にごめんなさい。急にパートの面接を受けることになっちゃ  
って、そうしたらそこで履歴書のことでしたっごくしっごく聞いただされて……。

風子 履歴書のなにを？

ミドリ ……年齢のところ面接の人の目がクギづけになっちゃって。

照子 サバ読んだの？

ミドリ ……十八歳から四十五歳くらいまでっていう募集だったの。だから、少しでも長く働けるようにと思って……。

風子 まさか十八って？

ミドリ ……ごめんなさい……。

照子 ここで謝られても……。

ミノル (田之中に) あれがミドリさんですよ。

田之中 ……老けたなあ……。

恵 それで、面接は？

ミドリ ダメだった……。

風子 あたしならその勇気を買って絶対採用するのに。

ミドリ ……あたし、田んぼに行つて来るわね。みんなはゆっくり休んでて。(田之中に気づいて)……。

風子 田之中さん。ここを買ってくださいるかもしれないの。

ミドリ やっぱり、売っちゃうんだ……。

恵 でもまだそれは……。

田之中 ……ひさしぶり。

ミドリ ……はい？

田之中 いるとは思わなかった。

ミドリ ……どこかで、お会いしましたっけ？

田之中 オレだよ。わからない？

ミドリ ……ああ！ ああ、どうもご無沙汰してます……。

田之中 わかってないよな？

ミドリ ごめんなさい……。

照子 ヒントもらえば？

ミドリ ……(田之中を窺い見る)。

田之中 ……ユタカだよ。

ミドリ ……なにがですか？

田之中 オレの名前。

ミドリ ……ごめんなさい。少し時間ください。あの…草むしりながら思い出しますから。(と、逃げるように退場)

ミノル 僕、手伝います！(と後を追う)

マモル 僕も行きます。(と後を追う)

恵 田之中さん、ミドリさんとお知り合いだったんですか？

田之中 ええ、まあ。幼なじみというか…。

照子 何年ぶりの再会？

田之中 ……三十年近くになりますね…。

風子 なのに十八つて履歴書に…。

田之中 (つぶやくように) そっか…忘れられちゃったか…。

#### 四

前場から数時間後。

茶の間で話をしている風子、恵、田之中の三人。

田之中 ……とまあ、このように農地の売買についてはいろいろ面倒な手続きがあるのですが…。

風子 (ため息) 本当に面倒くさそう…。

田之中 書類については専門家にまかせてしまえばどうということはありません。

それより問題は…。

恵 田之中さんはおいくつまでこちらにいらしたんですか？

田之中 ……忘れました。ずいぶん昔です。

恵 この家のことはご存知でした？ 祖母は稲村ヨネっていったんですけど。

田之中 ああ。……そうですね、そう言われればなんとなく……。

恵 あたしたちも子どもの頃は毎年遊びに来てたんですよ？

風子 どこかですれちがってたかもね！

田之中 ……それで問題はですね……。

恵 びつくりなさったんじゃないですか？ ここがこんなさびしい場所になってしまつて。

風子 もう完全に廃村だものね。

田之中 いずれはこうなると思つていました。みんな稼げる場所に出ていきましたからね。結局、おばあさまのように自給自足の慎ましい暮らしを続けられる人間は誰もいなかったんですよ。……で、そのおばあさまの……。

恵 本当によく続けられたと思います。風ちゃんもちよつとでいいから草取りしてきたら？ おばあちゃんの偉大さが身に沁みてわかるから。

風子 やあよ。むくむんでしょ？ 顔が。

田之中 その偉大なおばあさまの……

恵 でもおかしな話ですね。村を出て行った人たちは、食べていくために食べ物が出て来る場所を捨てたつてことでしょうか？

風子 ほんと愚かよねえ。とにかく田舎は嫌だ、金持ちになりたいって後先考えずに出てつたんでしょ。お父さんなんて典型じゃない。あ、田之中さんは違いますよ？ ちゃんとお金持ちになつてるんだし。

田之中 ですがその人たちのおかげで、今の外食産業はここまで成長できたんですよ。昔は食事と言えば、決まった時間に家族そろつて家でするとというのがごくあたりまえだったでしょう？

恵 ウチも外食なんて母の日くらいしかしなかったです。

田之中 でも一人暮りで仕事に疲れて自炊も面倒となれば、どこかへ食べに行くしかありませんよね。彼らのそういった食生活が、外食を日常的なものへと変化させてくれたんです。私の立場から言えば、あの時代から言えば、あの時代に都会へ出て行った人たちに足を向けては寝られませんよ。

風子 あたしは父にだけは思いっきり足を向けて寝たいです。どの方角にいるのか

わからないのがとっても残念。

田之中 その行方不明のお父様ですが……。

恵 ミドリさん、まだ草取りがんばってるのかな。そろそろ呼んできましようか？  
田之中さんいろいろお話しになりたいでしょう？

田之中 ……私が話したいのは土地の売買についてなのですが、どうやら恵さんには、それがご迷惑のようですね。

風子 そんなことありませんよ！ 少なくともあたしたち二人はもう喜んで！

恵 だけど……お父さんの生まれ育った家、あたしたちが勝手に処分しちゃってほんとにいいのかな……。

風子 そんなのお父さんの勝手さに比べたらもう可愛くて可愛くて目の中に入れても痛くないくらいよ。

田之中 私が先ほどから、何度も何度も言おうとしているのも、そのお父様についてなんです……。

そこへ照子が本人にとってはカカシのつもりである「お粗末」としか言いようのない工作物を持って入って来る。

照子 ねえねえ、ちよつとこれ見て。

風子 (無視して田之中に) 今さら父がなにか関係あるんですか？

田之中 ええ……と言いますのも……。(照子とカカシもどきが気になる)

照子 どうか？ (眺めて) あれ？ なんか曲がつてる？

田之中 (気になる) この土地の……相続について……。

照子 ねえ、どう？これ。雀逃げると思う？

風子 はつきりおっしゃってください。

田之中 つまり、おばあさまが亡くなったことによって、本来なら息子である……。

(やはり気になる)

照子 ちよつとー見てってばー。(カカシもどきをまといのように上げ下げする)

田之中 ……なにか見せたがってらっしゃいますよ？

風子 無視してください。あれはとうが立った座敷童子ですから。

恵 要するに、順番からいってここは今、父のものだということでしょうか？

照子 (カカシもどきを組んでいた部分が崩れ) あ、壊れた。

田之中 失踪宣告を受けていれば話は別なのですが。

恵 失踪宣告？

田之中 七年以上生死のわからない行方不明者を、法律上死亡したものとみなす制度です。

照子 なんて見てくれないのよ。壊れちゃったじゃん。

恵 照ちゃん、悪ふざけもいかげんにしなよ。

照子 これ、カカシに見える？

恵 見えないよ……。

風子 ここを売るためにはその失踪なんとかを受けなきゃいけないんですか？

田之中 もしくは、お父様を捜し出すかですね。

間。

照子 ……じゃ、売るのがやめます。

風子 はあ!?

照子 すみませんでしたね、無駄足踏ませちゃって。

風子 (田之中に) わかりました。失踪なんとか、すぐ手続きします。

照子 妹はまあこのとおりの欲はありますけど悪気があるわけじゃないんで、勘弁してやってください。

風子 ちよつとこつち来なさいよ！ お姉ちゃん！(田之中に)すぐ戻りますから。

風子、照子を引きずって別室へ。

恵 ……本当にすみません。なんていうか……こちらの準備不足で……。

田之中 いえ、私の方が……突然押しかけてきて、事を急ぎすぎました。

恵 ……姉は……あ、カカシ作ってた方ですけど、すごいお父さん子だったんですよ。父が出て行って一番ショックを受けてたのも、カカシ作ってた方の姉で……。それ以来、一言も父のこと口にしないんです。最初はお父さんのこと怒ってるのかなって思ったけど、多分、カカシ作ってた方の姉は……。

田之中 あの、もうどちらのお姉さんかわかりますので。

恵 ……姉は、まだ待ってるのかもしれない。だからきつとこわいんです。父があたしたちを捨てたって認めるのも、二度と帰って来ないって考えるのも……。

そこへマモルとミノルがミドリを引っ張るようにして戻って来る。

ミノル まったく何を考えているんですか！

ミドリ だってだっていくらむしっても全然なんにもさっぱり思い出せなくて……。

マモル だからといって稲をむしりとりるなどもつてのほかです。

ミノル 雀よりタチが悪いな……。

恵 ああ、ご苦労様でした！

ミノル ミドリさんの暴走を止めるのが一番の苦労でした。

マモル これで草取りは完了です。

恵 ありがとうございます。

マモル あとは稲穂が実るのを待って、水を抜いて田んぼを乾かせば……。

別室から風子の「もう！ お姉ちゃんのお知らせ屋！ 変わり者！ 売れ残り！」などの罵声が聞こえる。

恵 ……すみません、ちよつと見て来ます。（と別室へ）

ミノル ……何事ですか？

田之中 ここの売却を巡って、推進派と反対派で姉妹喧嘩。

マモル ……照子さんが反対派ですか。

田之中 出てったきりの親父さんのことがひっかかるらしいよ。

ミドリ 当然ですよ。だっていつかお帰りになるかもしれないし……。

田之中 ……そう言えば、ミドリさんも昔、ずっと誰かのこと待っていましたよね。

ミドリ ……。あの……ごめんなさいあたし、ほんとうに忘れっぽくて、そのせいでよくクビになるんですけど……もしかして、どこかの仕事場で一緒に一緒にしたんでしょうか？

田之中 ……（マモルたちに）田んぼって仕事場か？

ミノル もちろんですよ。

マモル ……。ということは、ミドリさんも僕たちと同じ……。

ミノル ……ええ!?

ミドリ あたし、その時なにやりました？

間。

田之中 ……自分の事も忘れてるのか。

ミドリ ……ごめんなさい……。（どうつむいた足元にカカシの残骸）……なにかしら、これ。

田之中 ……「カカシ」だって言っていましたよ。一番上とは思えない長女のかたが。

ミノル 必要ないって言ったのに……。

マモル そしてまたなんとお粗末な……。

ミドリ かわいそうに……。壊れちゃってる。（と、直し始める）

ミノル （その様子を眺め）……カカシが……カカシを……。

マモル ……田之中さんは……。

田之中 ……。ユタカでいいよ。

マモル ユタカさんは、どうしてここを出て行かれたのですか？

田之中 ……村の人間たちがみんな都会に出てったから、それにつられてってところかな。ここにはないものがあるんだろうって思ったし。

ミノル なにがありました？

田之中 なんだってあったよ。一度自分の目で確かめてみたらいいさ。そうだ、い

っそオレの会社で働くか？

ミノル 無茶ですよ。僕たちが会社勤めなんて……。

田之中 都会で働く仲間は大勢いるぜ？

ミノル ……本当ですか？

田之中 日本中の農村から出て来てるヤツらがあちこちにいる。たいていは仕事で成功してるよ。なにしろオレたちはその気になれば、飲まず食わず眠らずで働けるし我慢がきくだろ。そこらの人間なんかに負ける訳ないからな。まあ中にはラクばかりしたがるヤツもいるけどね。政治家になってるのが多いよ。立つのが得意だからってだけで気軽に立候補しちゃうんだよな。またそれに票が集まるってのが、オレにはいまだに理解できない。

ミノル 都会で就職かあ……。あ、でもお仕事の口ならミドリさんに……。

ミドリ あたしはいいの。ここを離れるつもりないし。

田之中 ……やっぱりまだ待ってるんだ。

ミドリ ……。

田之中 そのことだけは忘れてないんだ。

マモル 田之中さんは……。

田之中 ユタカでいい……。

マモル ユタカさんは、ここを買ってどうなさるおつもりなのですか？

田之中 ……田んぼを作るんだよ。

マモル はい？

田之中 言つとくけど、おまえたちがちまちま守ってるあんなちっぽけな田んぼじゃないからな？ 見晴るかす田園風景をこの村に復活させるんだ。名づけて「ふるさと奪還&再生プロジェクト」！

田之中、勇ましく歌い始める。

田んぼを作ろう 荒地を起こそう 人間の手を借りず

田んぼを作ろう ぬかるみに帰ろう オレたちだけの楽園

もういらぬ 新しいものはもういらぬ  
そのかわり なくしたものを取り戻そう

世界はここでオレたちがなにをしようと  
ほとんど気にとめないだろう まして  
記憶にとどめもしないだろう ならば

水清き 青い風渡る

あのふるさとを 取り戻そう

オレたちの オレたちによる

オレたちのための 田んぼを作ろう

ミノル ……歴史に残る名演説ですね……。

田之中 あんたたちも手伝ってくれるよな。

マモル ですが田んぼというのはもともと人間の……。

田之中 今じゃお荷物扱いだろ。実際こうやって放り出されたり売りに出されたり

…… (ミドリに) だからいくら待っても無駄じゃないかな。

ミドリ ……なんのことですか？

田之中 田んぼどころか家族まで捨てるようなヤツが、今さら帰って来ると思う？

ミノル (ミドリに) そんな人でなしのお帰りを待っているんですか？

ミドリ ……。

田之中 あつちはまだオレたちのことなんかとつくに忘れてるよ？ だったらオレ

たちも、人間のことは忘れよう。

ミドリ ……あの……

田之中 なぜかオレのことはすでに忘れてるみたいだけど……。

ミドリ あの、さつきから「人間」て言葉の使い方がおかしくありませんか？

田之中 ……。

ミドリ なんだかまるで自分たちは人間じゃないみたいな……。

間。

ミドリ ……「そんな馬鹿な」とか誰か言ってくださいよ。

田之中 ……。

マモル ……。

ミノル ……。

ミドリ 人間ですよね!?

ミノル ……今は。

ミドリ 限定しないで!

マモル ……カカシ……。

ミドリ はい!?

マモル ……直りましたか?

ミドリ まだ……骨組みだけ……。

ミノル (田之中に) 真実を知らせるって勇気がいりますね。

田之中 ……わかった。捜して来る。

ミドリ え?

田之中 とにかくもう一度会えば気がすむだろ? なにか思い出すかもしれないよ

な?

ミノル 案外、世話焼きなんですね。

田之中 イライラすんだよ! なんにも覚えてないくせに、こんなうら寂しい場所

で、ずっと待ってるヤツがいるのかと思うと!

風子 (その瞬間、興奮したまま勢いよく入ってきて) 田之中さん!

田之中 (思わず) ユタカでいいって!

風子 じゃあユタカ! すみませんけど帰りも乗せて行ってください!

田之中 ……どうなりました? お話し合いは。

風子 話し合いは決裂しましたけど、ここは必ずお売りしますから! さっきの失

踪なんとかのこと、お車の中で詳しく教えてください。

田之中　しかし……

風子　さ、早く！一刻も早く行きましょう！

田之中　（急かされ促されながらマモルたちに）例の計画、考えといてくれよ？

田之中、風子とともに退場。

照子と疲労の色を隠せない恵が入ってくる。

照子　……ほんとに帰っちゃった。

恵　照ちゃんがまじめに話そうとしないからでしょう？

照子　あんまり怒ってたから場を和ませようとしたんだけど。

恵　そういう態度がよけい人の気持ちを逆なでするの！この家のことは別にして  
も、お父さんのことは風ちゃんの言う通り、もうケジメをつけてもいいんじゃない？  
い？　そうじゃなきゃあたしたち……。

照子　（ミドリに）あ！直してくれてるの？

恵　そういう態度のことを言ってるのに……。

ミドリ　ごめんなさい、勝手に。でもこれ、せつかくならもう少しちゃんと作って  
あげたら？

照子　じゃあミドリさんも手伝ってくださいよ。裏にいろいろ材料あるから。

恵　ミドリさん、今作業終えたばかりじゃない。

ミドリ　あたしなら大丈夫。全然疲れてないし。（照子と裏に向かいながら）風子ち  
ゃんとケンカになったの？　お家のことで。

照子　いや、別に？（カカシを掲げ）これ、男と女どつちに見えます？

ミドリ　……ごめんなさい。ただの棒切れにしか見えないわ。

照子とミドリ、退場。

ぐったりとしている恵。

マモル・ミノル ……お疲れ様でした。

恵 (大きなため息) ……もういつそ帰ってきてくれないかなあ、お父さん……。

暗転

## 五

暗闇の中から雀の声。

ミドリとユタカがそれぞれ離れた位置に不動の姿勢で立っている。

雀の声が次第に近く集まってくる。

ミドリ あの、すみません、ちょっとやめてください。おなかすいてるのはわかり  
ますけど、でも困るんです、お願いします。あ、ちょっとあの……頭つつかな  
いで……。

ユタカ (ドスを効かせた大声で) あっちいけ! ゴラア!

飛び去って行く雀たちの声。

ミドリ ありがとうございます……。

ユタカ 雀にお願いしてどうするんですか。

ミドリ ごめんなさい。今年もユタカ君にはお世話になりどおしで……。来年はが  
んばります。

ユタカ 今年もまだ幾分残っておりますが……。

ミドリ そうでした。(雀の声になんとも情けない声で) あっちいけこらあ。

ユタカ ……ミドリちゃん。

ミドリ ごめんなさい。来年までにはもう少し……。

ユタカ 僕は、ここを出て行こうと思います。

ミドリ ……そんなこと、できるわけないじゃありませんか。

ユタカ いったったか旅のご老人から聞いたでしょう？ カカシが人間になる話を。

ミドリ あんなのただのお話ですよ。だってあたしたちはほら(動こうとして)ね？  
一歩も歩けない。

ユタカ まずは歩けないという思いこみを捨てること。そしてどうしても動き出さねばならないような高い志を持つこと。ただしそうやって人間になれるのは……。

ミドリ 本気じゃないですよ？ ここを出て行こうなんて。

ユタカ 村の人間が減っているでしょう？ 学校を出た子どもたちを先頭に、みんな街へ流れて行きます。そして誰も帰って来ません。

ミドリ 稔さんはちがいます。こうしてご自分の田んぼがおありなのだし。

ユタカ たまの休みにちよっとした作業をなさるだけではありませんか。あとはすべてお母様にまかせきりだ。それに年々お戻りの回数が減っています。近頃では、田んぼの手入れというよりも、生まれたお子さんたちのご自慢にいらしているようにしか……。

ミドリ 今はそうかもしれないかもしれませんが……でも、稔さん、「いつか日本一おいしいお米を作るんだ」って。

ユタカ 昔の話です。

ミドリ あたしたちはそのお手伝いをしなければ。

ユタカ ……ミドリちゃんだって知っているはずですよ。僕たちは、願わない人間を助けることができない。

ミドリ ……。(ハッと)でも稔さんこの間「宝くじが当たりますように」って……！  
ユタカ そんな専門外のことを願われても手の施しようがありません。第一、それが一番の願いだとすれば、稔さんがいま頼りにしているのはお金ですよ。僕たちじゃない。留どまる理由がどこにあるのですか。

ミドリ だって他に行く場所なんてないじゃありませんか。

ユタカ 村の人間たちが向かった街へ行ってみるつもりです。食べ物を作らなくなつたからといって、彼らが食わずにすむわけではない。困ることだってあるでしょう。近くにいればなにか手助けができるかもしれません。今度は、カカシとし

てではなく。

ミドリ ……ここにもまだ、あたしたちを必要としてくれる人たちはいますよ？

ユタカ その人たちもいずれ出ていきます。

ミドリ きつとみなさん帰っていらっしやいますよ。だってほら、見てください。

(まぶしそうに辺りを見渡す)

ユタカ ……(同じく眩しそうに) いちめんの黄金色こがねですね。

ミドリ こんなにきれいな場所なんですから。

ユタカ ……こんなきれいな場所が失われて行くのを見届ける勇氣は、僕にはないな。(と、足についた土を払い始める)

ミドリ ……動いた！

ユタカ ミドリちゃんにもできますよ。一緒に行きませんか。

ミドリ ……稔さんが寂しがります！

ユタカ だから今のうちに行くのです。

ミドリ ユタカとミドリって、立派な名前までいただいたのに……。

ユタカ 感謝していますよ。人間になれるのは、作り主から名前を与えられた力カシただけだそうですから。

ミドリ ……あたしは行きません。ここでいつも通り、稔さんのこと待っています。

ユタカ ……ミドリちゃんは、忘れられることが恐ろしくはないのですか。

ミドリ ……どちらかと言えばあたしは、忘れてしまう方が恐ろしいです。

ユタカ ……。もう会えないかもしれないかもしれませんが、最後にひとつだけ……(ドスの

効いた大声で) あっちいけ！ ゴラア！

ミドリ ……。

ユタカ 腹に、力を込めるのです。

ミドリ (精一杯) あっちいけ！ ゴラア！

ユタカ もう一度。僕を雀だと思って。

ミドリ (それなりの迫力で) あっちいけ！ ゴラア！

ユタカ ……忘れないでくださいね。

ユタカ、去って行く。  
雀たちの声の中、呆然と立ち尽くすミドリ。

暗転

## 六

九月の夕方。

ヨネの家にいるマモルとミノル。

ミノルは名残り惜しそうにアイスクャンデーの棒を舐めている。

ミノル あー、冷たかった。

マモル ……たいへんな気に入りようですね。

ミノル アイスクャンデーと出会えただけでも、田んぼを出て来た甲斐があるというものです。僕らの知らないこういった素晴らしいものが都会にはたくさんあるのですね。マモルさんもおひとついかがですか？ 都会の味がしますよ？

マモル ……なんですか、都会の味とは。

ミノル とにかく冷たいのです。

マモル わざわざ都会に冷たさを求めずとも、これから次第に寒くなってきましたよ。九月も半ばなかに入りましたからね。

ミノル 土が乾くまで一週間といったところでしょうか。

マモル あとはいよいよ稲刈りですが……みなさんお集まりくださるかどうか……。

ミノル 問題はその後ですよ。ここは一体どうなるのやら。

マモル あれからどなたもおみえになりませんかしねえ。

ミノル 僕は是非とも照子さんにごんばつてほしいです。ここがユタカさんの手に渡れば、「ふるさと奪還&再生プロジェクト」に巻きこまれてしまいますからね。

マモル 田之中さんのお気持ちもわからないではないですが……。

ミノル どうしてあれほど自信に満ち溢れていられるのでしょうか。

マモル 「オレたちの、オレたちによる、オレたちのための……」と、あそこまで

カカシ本位の主張をなさるのはいかなものか……。

ミノル 実るほど頭を垂れる稲穂の姿勢を少しは見習ったらいいのに。

マモル できることなら、「おいしいお米を食べたい」と願うどなたかのために働きたいものです……。

ミノル やはり照子さんにはがんばってもらわねば。

マモル しかし照子さんが来年もお米を作ってくださいとは思えませんが……。

ミノル そうなったら僕は都会へ出てみようと思います。

マモル ……アイスクャンデーを見に、ですか？

ミノル いろいろなものを見に、ですよ。ヨネさんが教えてくれたこと以外はなにも知らないままなんて、もったいないと思いませんか？

マモル ……しかしヨネさんからは充分過ぎるほどさまざまなことを……。

そこへミドリが、あちこち折れて傷だらけのカカシを抱きかかえて入ってくる。

ミドリ どうでしょう！ ヨネさんが……！

ミノル うわあ、なんとという変わり果てた姿に！

マモル (傷の様子を見て) ……イノシシですね……。 (ミドリに) 稲の被害は？

ミドリ (首をふり) 襲われたのはヨネさんだけみたいで……。

ミノル 以前お相撲に負けた腹いせでしょうか……。

ミドリ せっかく照子ちゃんが一生懸命ヨネさんに似せて作ったのに……。

マモル 実際作っていらしたのはほとんどミドリさんでしたが……。

ミドリ (カカシに) ごめんなさい。あたしがもう少し早く来ていれば……。

ミノル ミドリさんが謝ることはありませんよ。つついアイスクャンデーに夢中になっっていた僕たちが悪いんです。

マモル 今の「僕たち」という発言はやや正確さを欠きますが、我々の職務怠慢で

あることには違いありません。ミドリさんにはなんの落ち度もない。

ミノル (カカシに) ありがとうございます。ここまで体を張っていただいて。

ミドリ ……今度はあたしが立っています。ヨネさんの代わりに……。

マモル それは僕たちの仕事ですから。

ミドリ ……でも……。

ミノル ミドリさんはなにかと責任を感じすぎです。もっと楽しいことを考えまし

ようよ。今日はどんな御用でいらしたんですか？ アイスクャンデーの補充に？

マモル それはミノル君だけが楽しいことでは……。

ミドリ ごめんなさい、今日は買ってこなかった……。

マモル いつでも気軽に手ぶらでいらしてください。さらなければ困ります。イノシシも追っ払えない役立たずの居候に、余計なお気遣いは無用です。

ミドリ あなたたちは、役立たずの居候なんかじゃありませんよ。

ミノル そりゃあ僕たちだってやる時はやりますよ。今日は本当にたまたま……。

ミドリ ……ヨネさんがいつも、田植えと同時にカカシを立てていたのはどうしてか知っていますか？

ミノル ……知りません。どうしてだろう。

ミドリ 雀除けには早すぎるでしょう？

ミノル ……(マモルに) ほらね？ 僕たちは知らないことが多すぎますよ。

マモル (カカシに) どうしてですか？

ミノル (カカシに) あとでうっかり忘れるといけないから？

ミドリ 家族だから、だそうですよ。

ミノル ……家族……？

ミドリ カカシは自分の家族だから、あの二人には田植えからずっと一緒にお米作ってもらったって。

マモル ……。

ミノル ……。

ミドリ あの二人って、あなたたちのことでしょうか？

間。

ミドリ ほんつとうにごめんなさい。何度もお会いしてましたよね？ あたしっちらちつとも気がつかなくて。怪しい人たちだつて疑ったりして……。

マモル こちらもあえて詳しくはご説明しませんでしたし……。

ミドリ 時期こそ違えど、同じ田んぼに立っていたカカシ同志だったのに……。

マモル 大先輩のミドリさんにそう言っていただけで光栄です。

ミドリ 大先輩なんてやめてください。あたしなんて……お二人がうらやましいです。自分を作ってくれた人から家族と思ってもらえるなんて。

マモル ミドリさんをお作りになった方だつてきっと……。

ミドリ あたしとユタカ君のこと、家族と思ってくれたのでしょうか？

マモル ……ずっとお待ちになっているのはその方ですか。

ミドリ ……ええ。

マモル ああ、それで田之中さんもあれほど必死に……。

ミノル 先ほどからなんの驚きもなくなめらかに会話が進行していますが……ミドリさん、すっかり思い出したんですか？

ミドリ ……ずっと昔の、夢をみたんですよ。

夢のようにきれいな場所で

ひとりぼっちになった夢

夢だと思つて忘れたい

ほんとうにあったことだけど

夢のようにきれいな場所は

草むらに消えて夢のあと

夢だと思つて忘れなきや

二度とここには立てないなら

それで田んぼを飛び出した時にヨネさんが声をかけてくれたんですよ。「どこから来たの？」って。あたし嬉しくて、ずっと誰かと話したかったから、嬉しくて舞い上がっちゃって、「町から散歩に来たんです！」なんて口からでまかせ言ってしまったんです。そう言った手前、町へ下りて、住むところ探して仕事を探して……。

マモルとミノルが続けて歌う。

マモル 夢を見るひまもないくらい

人間の暮らしは忙しい

ミノル 夢だと思って忘れたかった

ことすらとんと思い出せない

ミドリ ……それですっかり自分のことを人間だと思いこんでしまつて……。稔さんとのことも……

ミノル ……僕？

ミドリ 都合のいいお話を勝手に作つて信じていたんです。あたしたちはこの村でおとなりさん同士だったとか、昔は仲良く草取りや稲刈りをしたとか、一緒にお米を作る約束をしたとか、そういう、ありもしない思い出話を。

ミノル ……確かに身に覚えのないことばかりですが。

マモル 別のミノルさんのお話なのでは……。

ミドリ ……そう言えば、あなたもミノルさん……。

ミノル ひよつとしてその人ですか？ ユタカさんの言っていた、故郷も家族も捨てた人でなしというのは。

ミドリ ……稔さんは人でなしなんかじゃありません。

ミノル もちろん僕は違いますよ。人ではないですが。

マモル ですからミノル君のことではなくて……。

ミノル ……紛らわしいのでそちらのミノルさんを「みっちゃん」と呼んでいただ

くわけには……。

ミドリ ごめんなさい。イヤです。

ミノル そうですか……。

ミドリ きつとなにか理由があったんですよ。だって稔さんは、田んぼのことも（家族のことも、あんなに大事にされていたんですから）

そこへ恵が姿を現す。

恵 こんにちは。（カカシを見て）わ、ひどい。どうしたんですか？

マモル イノシシが出たようで。

ミドリ ごめんなさい恵ちゃん、ヨネさんをこんな目に遭わせてしまつて。

恵 それをおばあちゃんの名前で呼んでるの、ミドリさんと照ちゃんだけですから……。

ミノル ユタカさんの件はどうになりました？

恵 ……？ ああ、田之中さんとのお話はまだ……。

ミノル 照子さんはがんばっていますか？

恵 ……あいかわらずなにもがんばってはいませんが……。とりあえずあたしたち、この家のことよりもまず、父のことをはっきりさせようって……。

ミドリ はっきりって……？

恵 もう風ちゃんがさつさと手続きしちやいました。半年後には死んじゃつたってことで認められるそうです。

ミドリ ……そうなの……。

恵 これでちよつとすつきりするかな。なんだかあたしたちって、いつまでも留守番させられてる子どもみたいだったから。もうみんないい大人なのに。

マモル ……なにはともあれお上がりください。

恵 （持っていた袋を差し出し）これお土産です。アイスクャンデー。

ミノル （うれしそうに受け取り）恵さんは本当にいい大人ですねえ。（と台所へ）

ミドリ ……あたし……ヨネさんの修理をしなくちゃ……。

恵 手伝いましょうか。

ミドリ いいの……あたし一人で。ごめんなさい……。

ミドリ、カカシを抱えてとぼとぼと出て行く。

恵 ……すみません、突然お邪魔して……。

マモル お邪魔もなにも、ここは恵さんたちのお宅なのですから。

ミノル (戻ってきて) わざわざアイスクャンデーのためにごくろうさまです。

恵 ……そのために来たってわけでは……。

マモル なにかあったのですか？

恵 ……家の中に、気の休まる場所がなくて……。

ミノル それはいけませんね。

恵 仕事も手につかないっていうか……。

マモル 僕たちでよろしければうかがいますが。

恵 ……つまらないことなんですけど……。

マモル お差し支えなければ。

恵 ……さっきのお父さんの話、やっぱり照ちゃんは渋々納得したって感じで、それ以来、なんだか家の中の空気が微妙に気まずくて……。でも照ちゃんが折れなくてお父さんのことも解決したんだし、このままぎくしゃくしてても仕方ないからって、風ちゃんと相談して、今朝は照ちゃんの好きな物、朝ご飯に並べたんですよ。そしたら風ちゃんの作ったお味噌汁のトマトが湯剥きされてなかったみたいで、照ちゃんがその皮を食べちゃって、「なにこれ、こより？」って言ったのが、風ちゃんにはカチンと来たらしくて……そもそも風ちゃんはトマトがあまり好きじゃないんですよ。それで「イヤなら他のもの食べれば！」って大声出して、そしたら照ちゃんが、栗ご飯の栗だけを一人でほとんど食べちゃったんです……。風ちゃんは栗が大好きなもんだから、それで堪忍袋の緒が切れたみたいで、腹立ち紛れにいきなり照ちゃんの部屋の壁に「照子のバカ」って書き殴って、そしたら照ちゃんも負けずに「風子のバカ」って書き始めて、それで……それで

いま我が家には、「バカ」って書かれてない部屋がひとつもないんです……。(走り終えた人のような大きなため息)

マモル ……。

ミノル ……。

恵 ……すみません……。くだらない話を長々と……。

マモル いいお話ではないですか。

恵 ……どこが？

ミノル ご姉妹が仲直りのためにお互いの好物を拵えて、それをみんなでわいわい言いながら食べた後、元気に体を動かしたというお話でしょう？

恵 ……今のがそんなほほえましい話でしたか？

マモル ヨネさんが聞いたら、きっとお喜びになりますよ。

恵 ……。なんだか少し気が晴れちゃいました……。

マモル それはなによりです。

恵 あんまり人には言えないようなこんな話、お二人に聞いていただいたから。

ミノル 人には言えないことでしたらいつでもどうぞ。

恵 なんででしょうね、あたし、山田さんたちに家族の愚痴なんかこぼしちゃって…

…。お二人の名前のせいかな。

マモル 名前？

恵 マモルとミノルって、おじいちゃんとお父さんの名前なんです。

ミノル マモルと、ミノル……？

恵 おじいちゃんがマモルで、お父さんがミノル。

ミノル またミノル……。

恵 すごい偶然ですよね。

マモル それでヨネさんは僕たちを……。

恵 不思議なご縁を感じたんでしょね。おじいちゃんのマモルさんは、あたしたちが生まれるずっと前に亡くなってるんですけど。

ミノル ……僕、ちよつと失礼して田んぼの様子を見て来ます。

マモル それなら僕が……。(立ち上がりかける)

ミノル いえ、田んぼに立って頭の中を整理したいのです。(田んぼに向かいながらぶつぶつと) ミノルとミノルとミノル……。

ミノル、考えこんだ様子で出て行く。

取り残される恵とマモル。

恵 ……上着の裾、落ちちゃってますね。

マモル ……は？

恵 後ろ、綻びてる。直しちゃいましょう。ちょっと貸してください。

マモル 結構です！

恵 (バッグから裁縫道具を取り出し) すぐですよ。あたし、本職ですから。

マモル 縫い物の御仕事を？

恵 だから気になるんです。脱いでください。

マモル そんなことが僕にできるとはとても……。

恵 ……じゃあ着たままでもいいですから。あっち向いて。動かないでくださいよ？

(縫い始める)

マモル (ホツとして) 動かないことでしたら多少自信があります。

恵 ……母が着物を仕立てる仕事をしてたんです。和裁士って言うんですけどね。

子どもの頃からずっと縫い物してる母のこと見てきたせいか、なんだかあたしもあたりまえのようにこの仕事についちゃって。

マモル 跡を継がれたわけですね。お母様お喜びになったでしょう。

恵 唯一の親孝行だったかも。

マモル ……ちなみに、田んぼも継いでみようなどというお考えは……。

恵 ……はい！ おしまい。ね、あつという間だったでしょう？

マモル ありがとうございます。この御恩は一生……。

恵 覚えてたりしないでくださいよ？

マモル ……では、ほどよき頃まで忘れません。

恵 ……マモルさんは真面目ですね。

マモル は？

恵 たまにはわがまま言ったりふざけたり怠けたりしたいとは思わないんですか？

マモル …… 思いません。

恵 人に迷惑かけてやろうとか、むしゃくしやするから暴れてやれとか。

マモル 恵さんはそんなことを？

恵 思いませんが……。

マモル 恵さんも真面目ではありませんか。

恵 だから損ばっかりしてるような気がして……。今日だってあたしは家に帰ったから、どうせ誰も手をつけてない壁の掃除をしなきゃいけないんですよ？

マモル 御苦労さまです。

恵 お母さんもおばあちゃんも、ずっと真面目に生きてたのに、苦労なんか全然報われなかったし。

マモル それでも僕は真面目が悪いことだとは思いません。ご覧ください。あの夕日を。その光に照らされて輝く田んぼを。

恵 ……きれいですね。

マモル 夕日も田んぼも真面目だからです。

恵 はあ……。

マモル あそこに、ミノル君が立っているでしょう？

恵 さつきから、ピクリとも動きませんが。

マモル あれも真面目だからこそ出来ることです。

恵 ……ここではみんな真面目なんですね。

マモル そうです。お米を作る人も育てられる稲も、それを狙うイノシシや雀も、みんなみんな大真面目です。ですからこちらも真面目に向き合わなければ。

恵 お姉ちゃんたちに聞かせたい……。

マモル あのお二人も充分真面目だと僕は思いますが。

恵 照ちゃんもですか？

マモル 照子さんは、いつも真面目にふざけていらっしやる。

恵 ……。

マモル 来週の稲刈りには、みなさんご参加くださいますか？

恵 そのつもりです。二人にも言っておきますよ。まじめに稲刈りするようにって。

マモルと恵、まじめな面持ちで歌い始める。

まじめに まじめに

こつこつと 手を抜かず

根気よく 投げ出さず

まじめに まじめに

笑われて 損をして

報われず バカをみて

それでも まじめに

まじめに生きた そのご褒美に

まじめに生きたと 胸をはろう

まじめに まじめに

まじめに おお まじめに

暗転

## 七

暗闇の中に照子が一人立っている。

照子 昔々、あるところに「ああ、もう米作りなんて大変だ。宝の山でもみつけて毎日ラクして暮らしたいよ」と思ってる男がいました。ある日、男は黄金に輝く宝物があるという噂の穴へ入っていきました。すると遠くからまぶしい光が射しこんでいて、その光の方へどんどん上って見たところ、なんとたどりついた先は、

稲穂が実った自分の田んぼの真ん中だったので。そして男は、一生懸命育てた稲こそが、黄金に輝く宝物だったことに気がつきました、とさ……。

お話の終わりと同時に明るくなると、そこでは稲刈りの真っ最中。

田んぼのすみっこには、先日名誉の負傷を負い、あちこち手当てを施された痛々しい姿のカカシが立っている。

恵 余韻に浸ってないで手え動かしてよ。

ミドリ ……素敵なお話ね。

風子 なにそれ。百姓は一攫千金の夢なんか見るなってこと？

照子 昔おばあちゃんが話してくれたの。風子がおねしよした布団干しながら。

ミノル 僕もヨネさんから伺いました。風子さんはスイカを食べた晩には必ずおねしよをなさると。

風子 そういう誰のためにもならないエピソードは早く忘れてください。

ミノル そうだ！ 忘れてました！ ご挨拶をまだしてません！

マモル ああ！ うっかりしていました！

照子 ご挨拶？

マモル 毎年収穫の前には必ず稲にご挨拶をするんですよ。

ミノル 「よくぞここまで無事に育ってくれました。ありがとうございます」って。

風子 ふつう逆でしょう？ 結婚式の前にお嫁さんがご両親に言うじゃない。「今日まで大切に育てていただいてありがとうございます」って。

マモル しかしヨネさんがおっしゃるには、本当に稲を育てるのはお天道様や空気や風や雨であって、人間はそのお手伝いをするだけのことですから。

ミノル そのまたお手伝いをするけなげなカカシにもきちんとご挨拶をするのです。

照子 ふーん。

恵 じゃあ一応あたしたちもおばあちゃんの代理として……。

照子 その前に、ちよつと休憩したら？

恵 ……照ちゃん、まだ一株も稲刈ってないよね？

照子 あんまり根詰めると、そのまま腰の曲がったおばあさんになっちゃうんじゃない？

風子 そうやっていくら怠けてたって、おばあさんになるのはお姉ちゃんの方が先なんだからね！

照子 でも稲刈りしてる時の風子、怖いくらいおばあちゃんに似てたよ？

風子 冗談じゃないわよ！ おばあちゃんお父さんとそっくりだったじゃない！

恵 (ミノルに) すみません。空気が悪くなってきたので休憩させてください。

ミノル それではのちほど。必ずご挨拶から始めましょうね。

三姉妹は思い思いに腰を下ろすが、残りの三人は立っている。

照子 (マモルに) 休まないの？

マモル こうしている方が休まりますので。

恵 (カカシを見てミドリに) よくここまで直しましたね。

ミドリ でもなんだか痛々しい姿になっちゃって……。

ミノル 立っているのがやつとでしように……がんばりますね。

風子 (町の方を気にしながら) 結局ユタカはおみえにならないのかしら……。

恵 もう呼び捨てやめたら？……っていうか誘ったの!?

風子 「稲刈りしますけどもしよかったら」ってね。失踪なんとも済ませて、ようやく話も進められるし。

恵 また勝手に……。

照子 そんなに小金が欲しいかねえ。

風子 いらぬものは処分しなくちゃ。お姉ちゃんの部屋みたいにゴミ溜めになっちゃう。

ミドリ でもここは、何度も夏休みを過ごした場所でしょう？ あたし覚えてるもの。風子ちゃんがあぜ道走りまわったり、アメンボつかまえたり、田んぼにスイカの種飛ばしたり……

照子 おねしょしたり。

ミドリ そうやって楽しそうにしてたこと。なのに、ほんとにいらないの？

風子 父に関係あるものなんていりませんよ。むしろさっさと片付けて清々したいくらい。(再び町の方を見遣って)手伝いの人を連れて来るかもって言ってたんだけどなあ。

ミドリ ……。

雀たちの囁る声。

恵 ……今日は雀が多いですね。

ミノル これだけの人数を揃えているところへ大胆不敵な……。

マモル こら！ あっち行け！ シッ、シッ！

ミドリ あっち行け！ ゴラア！

一同、その迫力に啞然。

照子 どうしっちゃったの、ミドリさん……。

ミドリ オラオラ！ あっち行け！ ゴラア！

風子 あ！ 来てくれた！

ミドリ大奮闘中のところに田之中が姿を現す。

田之中 ミドリちゃん……？

ミドリ (その姿を見て取り、一番の迫力で) あっち行け！ ゴラア！。

田之中 ……。

ミドリ ……お腹に、力を込めるんですよね？

田之中 ……そうですね。よく出来ました……。

風子 (田之中の顔を覗きこみ) ……泣いてる？

ミドリ ごめんなさいユタカ君。あたし……。

田之中 そうか、忘れたままだと思ってたから……。

恵 よかったですね。

田之中 ……連れて来ちゃったよ。

ミドリ え……？

田之中 言ったら？ 捜して来るって。ただ昔よりだいぶくたびれて……。

田之中、振り返るが誰も現れない。

田之中 ……。(姉妹たちに) どこ行きました？

恵 田之中さん、お一人でしたけど。

田之中 逃げた……？

風子 誰が？

田之中 お父さんですよ！ あなたたちの！ まだ遠くには行ってないはずだ。手

分けして捜してください！（マモルたちに）ほら早く！

ミノル でも、僕たちその人の顔を知りません。

田之中 見ればわかるから！

田之中、飛び出していき、ミドリ、マモル、ミノルもそれに続く。

風子 ……お父さん？ ほんとに？

恵 ちよつと照ちゃん、なにのんびり座ってんの？

照子 さっきのミドリさん、すごかったねえ。雀一斉に逃げたもんね。

恵 お父さんまで逃げちゃったよ。

風子 なんで今？ 失踪なんかどうなるのよ。

照子 雀って言えばこの前、仕事で鳥のこといろいろ調べただけどね？

恵 そんなことより早く探しにいかなきや……。

照子 ホトトギスってさ、「田植え始めろ」って知らせに来る鳥なんだってよ？ 知  
ってた？

恵 知らないよ！

風子 どうするの？ せっかく死んだってことで落ちつくところだったのに。

照子 5月ごろに渡って来てね、「テッペンカケタカ」とか「トツキヨキヨカキヨク」とか鳴くんだった。変な鳥だよね。

三姉妹、歌い始める。

三姉妹 テッペンカケタカ トツキヨキヨカキヨク

おかしな鳴き声 ホトトギス

田植え始めると急かしたあとは

よそ様の巣に卵を産んで

子どもも育てず秋風吹けば

南へ飛んでく渡り鳥

テッペンカケタカ トツキヨキヨカキヨク

自分勝手なホトトギス

田植えの頃にも帰らぬのなら

帰してみせよう ホトトギス

殺してしまえ ホトトギス

帰るまで待とう ホトトギス

照子

風子

恵

テッペンカケタカ トツキヨキヨカキヨク

テッペンカケタカ トツキヨキヨカキヨク

八

歌が終わると数十分後の同じく田んぼ。

ミドリに手当てを受けている傷だらけの父・稔。  
そのそばに田之中とマモル。

一方、ミノルの前で手を合わせている三姉妹。  
恵は父の様子が気になる。

ミノル (救護班をやや気にしつつ) えー、それではご唱和願います。「よくぞここまで無事に育ってくれました。ありがとうございます」

三姉妹 「よくぞここまで無事に育ってくれました。ありがとうございます」

ミノル では引き続き。「カカシさま。今年も田んぼをお守りいただき、ありがとうございます。長いご苦労に感謝いたします。思えば昼夜を問わずあなたさまが鳥たちを追い払ってくれたおかげで、今日のこの日を無事に……」

照子 長いよね？

ミノル そうですね。では、「カカシさま。今年も田んぼをお守りいただき、ありがとうございます。以下、省略」

三姉妹 「カカシさま。今年も田んぼをお守りいただき、ありがとうございます。以下、省略」

三姉妹が目を閉じておじぎをすると、マモルとミノルは恭しくその挨拶を受ける。

ミドリ ……やっぱり病院に行かれた方が……。

稔 (首をふる)

マモル とんだ災難でしたね。イノシシと鉢合わせなさるとは。

田之中 逃げ回ったりするからですよ。

照子 では稲刈りの再開といきますか。

ミノル あちらはほうっておいていいんですか？

恵 ……よくはないですけど、なにを話したらいいものか……。

風子 あたしはあるわよ。言ってやりたいことが山ほどね！(つかつかと父のもと

に歩み寄る)

稔 ……。

風子 ……。

風子、またつかつかと戻って来る。

恵 どうした？

風子 なによあれ！ あんな傷だらけのしよぼくれたおじいさんじゃ文句のひとつも言えないじゃない！

ミノル でしたらまず、こちらのカカシを相手に練習なさっては？

風子 はあ!?

ミノル だってそっくりじゃないですか。傷だらけだし、しよぼけてます。

田之中 (稔に) では本題に入りますが。

風子 …… (カカシに) よくそんな涼しい顔でいられるわね。

恵 するんだ？ 練習。

風子 メグちゃんも言いたいこと言いなさい！

田之中 お母様の残されたこの家と土地、私に譲っていただけませんか。

恵 (カカシに) えっと……元気だった？

風子 言いたいことってそれ？

恵 だって急に言われても……。

田之中 悪いようにはしませんよ。田んぼを潰すつもりもありません。

風子 (カカシに) 生きてんだか死んだかわかんない家族がいるってどんな気持ち持ちだと思う？

田之中 関係ないか。もういいんですもんね？ 田んぼのことなんかどうだって。

ミドリ そんなはずありませんよ。

風子 今頃のこのこ帰ってきて、あたしたちがあたたかく迎えるとでも……

照子 (割りこんでカカシに) ねえ。おばあちゃん。この藁で稲を束ねるってのがさ、どうもうまく出来ないんだけど。

風子 ちよつとなによ！

田之中 だから帰らなかつたんでしよう？

風子 今、あたしが話してるんでしょ？

照子 だってこれ、おばあちゃんの代わりなんだよ？

風子 誰だつていいわよ！ 練習なんだから！

田之中 (姉妹たちに) その練習とやらはもうちよつと静かにできませんか。

稔、照子のもとへ行き、照子の手にしていた稲を手際よく束ね始める。

照子 ……上手だね。

稔 ……。

照子 こういうことやってたんだ？

稔 ……。(束ねた稲を照子に返す)

照子 (田之中に) この人、どこでみつけて来たの？

田之中 うちの関連会社のビルで警備員のアルバイトをしていました。

照子 ガードマンのおじさんか。でもお見受けしたところ、農業経験者なわけね？

恵 照ちゃん、もうそういうのいいかげんに…。

風子 (田之中に) どうしてこんな余計なことなさるんですか？ あたしちゃんと

裁判所に行って、収入印紙も買ってめんどくさい書類出したんですよ？ ユタカ

がそうしろって言うから。

田之中 私は失踪宣告を受けるか、ご本人を捜し出すかのどちらかだと言っただけですよ。

マモル (稔に) ご挨拶が遅くなりました。マモルと申します。お母様にはたいへんよくしていただきまして。

ミノル ヨネさんとよく似ていらっしやいますね。

マモル きつとイノシシも見間違えたのでしょうか。

ミノル 僕、ようやくわかりましたよ。みなさんの言っていた「ミノルさん」で、

全部あなたのことだったんですね。あ、ちなみに僕の名前も「ミノル」って言う

んです。

風子 親交を深めなくていいですから！

ミノル あんなふうにおっしゃってますが、本当はお喜びだと思いませんか？ みなさんあなたに捨てられて、大層お困りでしたから。

間。

マモル ミノル君、もう少しだけ言葉を選んだ方が……。

ミドリ でも帰っていらしたんですよね？

風子 どの面<sup>つら</sup>さげて？

ミドリ またお米を作るために、帰って来てくれたんでしよう？

田之中 (稔に) あんなふうは無駄な期待を抱かせるなんて罪なことだとは思いませんか。いつまでも黙ってないで、はっきり言ってあげてください。全部忘れちゃいましたって。それくらい思いやりはあってもいいでしょう？

照子 しかし田之中さんもおかしな人だね。

田之中 ……私が？

照子 自分の田舎に執着するのはわかるけど、いくら土地がほしいからって、わざわざ行方不明の人間捜し出したりするかね？

田之中 拍子向抜けするほど簡単に見つかりましたよ。そちらこそ真剣に捜されたんですか？

照子 ここを買いたいならその人見つけた時にその場で交渉すればよかったんじゃない？ なんて連れて来たりするかなあ。

田之中 私はあなた方きょうだいご姉妹に筋を通したつもりなんですよね。最初にお話をくださったのは風子さんですし、他人の私だけがお父さんにお会いするというのもおかしい話だ。

照子 それにさ、なんか怒ってるよね？

田之中 ……怒ってる？

照子 その人に恨みでもあるみたい。風子に負けないくらい。

風子 あたしの恨みはそんな生易しいもんじゃないわよ。

田之中 どうして私が？

照子 それがわからないから、おかしな人だねって。

田之中 ……おかしいのはあなたの方ですよ。ふざけてばかりでちっともまじめに  
向き合おうとはなさらない。本当はこわいんでしょう？ 拒まれるのがいやで逃  
げてるわけだ。よっぽどお父さんのことが好きなんですわねえ。

照子 だったらどうなの？

間。

照子 子どもはさ、親に愛想尽かされたり、逃げられたりするのはいやでしょ。

それのどこがおかしいの？

稔 ……忘れました。

間。

稔 全部忘れちゃいました。もう二度と現れたりしません。だからなんでも好きに  
してください。……さようなら。

稔が帰ろうとすると同時に

風子 待ちなさいよ！

恵 待ってよ、ちよっと！

ミドリ 待ってください！

マモル お待ちください！

ミノル (ワンテンポ遅れて) さようなら。

という声がかかる。

発声した五人、顔を見合わせる。

風子 ……誰からにする？

恵 いいよ、風ちゃんからで。

風子 (稔に) 二度と現れないってことは、死んだと思って構わないのね？

稔 ……構わない。

風子 ……次の方どうぞ？

恵 (マモルとミドリにどうぞどうぞと促され) あたしはあの……お母さんのことだけ知らせておこうと思って。亡くなったんだよ？ 三年前に。

稔 ……知ってる。

恵 あ、そうなんだ。

稔 雑誌に、照子が書いてたの見た。「先日、私も母を亡くして」って。

照子 ああ、「現代のお葬式事情」って記事だ。

恵 あとね、あたし、お父さんの顔よく覚えてなかった。ウチに一枚も写真残ってないし、あの時あたしまだ小学生だったし。さつきもこれがほんとお父さん？  
て疑っちゃった。

風子 ……だからなんなの？

恵 疑って悪かったなって……。

風子 お人好しもいい加減にしなさい！

恵 ……(ミノルに) 次の方どうぞ。

ミノル 僕は「さようなら」ってご挨拶しただけなので。

風子 関係ないのよあんな人。もう死んだことになったんだから。

ミドリ だったら風子ちゃん、あたしにちようだい？

風子 ……なにを？

ミドリ お父さんを、あたしにください。

間。

ミドリ 大切にしますから。

風子 ……今、なにが起きてるの？

ミドリ (稔に) どこかにね、穴があるそうなんです。田んぼの真ん中に繋がってるんですよ。そこを通れば思い出しますよ。大事に育てた稲が宝物だったこと。

一緒にその穴を探しましょう。そしてまたお米を作るんです。

田之中 なにを血迷ったことを……！

マモル (田之中を制して) 言わせてあげましょう。

田之中 ……!?

マモル ミドリさんは今、とてつもなくがんばっていらっしやいます。

ミドリ あたしお手伝いますから。なんでもしますから。お腹に力も込められるようになったんです。一緒に田んぼを守ろうって言うてください。稲が無事に育つよう願ってください。

稔 ……失礼ですが、どちら様ですか？

ミドリ ……ミドリです。

稔 ……ミドリ……？

恵 お父さん……なにがあったの？ ミドリさんと。

稔 なにもないよ……。

風子 だったらどうしてあたしが「お父さんをください」なんて言われなきゃならないのよ！

稔 知らないよ！

ミノル でもせつかくあそこまで熱心に誘われているのですから。

稔 今さらそんなことできるわけないだろう。守れないから捨てたんだぞ？ 家族も田んぼも、自分には守れないと思ったから逃げのに……。

照子 さぞ勇気がいったらうね。母親と妻と娘たちと、五人も女を捨てるのはさ。

稔 ……女は、強いから。

風子 男尊女卑だわ。

恵 逆じゃない？

稔 おふくろも、おまえたちのお母さんも、明るくて、働き者で、強い人だったよ。

実際オレがいなくても、こうして田んぼや子どもたちを守ってくれたんだから。おまえたちだって、親なしでも立派に生きてる。女は強いよ。オレみたいな男なんかよりよっぽど頼もしいよ。

照子 ずいぶん買いかぶられたもんだ……。

稔 ……そう思わないと、置いて行けなかったしな。(ミドリに)そういうわけですから、私はもう米をつくる資格なんてないんですよ。どこのどなたか存じませんが……。

ミドリ ……ミドリです……。

稔 ……ミドリって、まさか……。

恵 あるんだ？ 心当たりが。

稔 そう言えば見覚えが……いや、そんなはずあるわけないな。

照子 なによ。

稔 なんでもない。

風子 気になるじゃない！ 言いなさいよ。

稔 (もぞもぞと) 初恋の相手がミドリちゃんていったけど、もう七十近いはずだし……。

照子 ……ミドリさんは自称十八歳だよ？

風子 馬鹿馬鹿しい……聞かなきゃよかった。

稔 風子が言えって言ったんじゃないか。

風子 急に父親面しないでよ。

稔 ……悪かったな。……もう行くよ。それじゃ……。

恵 あ、でもマモルさんの順番がまだ……。

マモル 僕は質問が二つありまして。三姉妹のみなさんのお名前をつけられたのは、一体どなたですか？

稔 ……私ですが。

マモル そうでしたか。てっきりヨネさんかと思いました。お天道様が照る、風が吹く、雨の恵みという三つのお名前の素晴らしさに、いつも感心していたのです。

よほどお米作りを愛する方がお付けになったのだろうと。

ミドリ ほら、やっぱり稔さんは……！

田之中 頼むからもうあきらめてくれよ。オレがここ買ったらいくらでも米作っていいからさ。

風子 (稔に) もう一回訊くけど、ほんとに死んだってことでいいのね？ ここ売っちゃうからね？

稔 ああ、いいよ。

照子 そんな口約束したって法律的にまずいでしょ。ああして本人出てきてるんだから。

風子 ……じゃあどうすればいいのよ。

田之中 手っ取り早いのは、私がお父さんからここを買いつつて、その代金を娘さんたちに……。

風子 父との縁が切りたくてここを売ろうとしてるのに、どうしてその父からお金をもらわなきゃならないんですか？ 絶対イヤです。

稔 ……誰から貰ったつてお金はお金だろう。

風子 そんな理屈通してたら、誰としたつて結婚は結婚だろうつてことになって、お父さんみたいなダメ男とくつついちゃうかもしれないじゃない。

稔 おまえ、まだ結婚してないのか……。

風子 関係ないでしょ！ お父さんには！

マモル (そのやりとりを見て) 仲がよろしいですね。

恵 あたしもちよつとそんなふうに見えてきました……。

田之中 結局ここはどうなさるんですか。

風子 欲しければあの人から買ってください。

稔 私にはここを受け継ぐ資格なんてありません。

田之中 ああもう、人間てのは……。

ミノル 結局のところ、ミノルさんはなにをしにいらしたんですか？

照子 直球だねえ……。

ミノル イノシシと戦うためではありませんよね？

稔 ……見納めに来たんだ。もう帰る場所なんか無いって、自分に言い聞かせよう

と思っ……。

ミドリ ヨネさんが残してくれたお家と田んぼがあります！

稔 その田んぼのあと始末もしなけりゃって……。だけど来て見たら「あっち行け、あっち行け」って賑やかで……。誰もいないって聞いてたのに。

田之中 人間は誰も住んでいませんって言ったんです。

ミノル ……要するにミノルさんは、稲刈りをなさりにいらしたんですね？

稔 だからそれは誰もいなかったらの話で……。

恵 ……マモルさんのもうひとつの質問てなんですか？

マモル ああ、おケガの具合はいかがかと。もしお差し支えなければ、稲を束ねる係をお願いできないでしょうか。先ほどの見事な手さばきで。

ミノル アイスキャンデーを召し上がるといいですよ。傷にも効くかもしれません。

ミドリ やりましょう一緒に。来年もなんて、もう贅沢いしませんから。

稔 (ミドリとみつめあいつつ) ……で、あなたは……。

照子 ミドリさんはね、あたしたちやお父さんの代わりに、最後までおばあちゃんといってくれた人だよ。

稔 ……それは大変お世話になりました。

ミドリ 当然のことをしただけです。

稔 ありがとうございます。

ミドリ ……こちらこそ。

ミノル (空を見上げ) ああ、もうお日様があんなところに……。えーみなさん！休憩の取りすぎです。秋の日は釣瓶落つるすとしと申します。ただちに稲刈りを再開してください！

それぞれが思い思いの場所へと動き出す。

風子 (稔に) 稲刈り手伝ったからってあたしたちが許すと思ったら大間違いです

からね！

稔 許してもらおうなんて思っ……ないよ。

田之中 それよりちゃんと土地のこと話し合ってくださいよ。

風子 こんなことになったのもユタカのせいですよ？

稔 失礼だろう、呼び捨てなんて！

風子 (ふいっと姉妹のもとへ)

田之中 ……稔……稲村さんも、ユタカでいいですよ。

稔 ……いいお名前ですね。

田之中 どうも。

稔 もし男の子が生まれたら、ユタカってつけようと思ってました。うちは女ばかりでしたが。

田之中 ……そうですか。

ミドリ ユタカ君も、稔さんのお手伝いしてください。

田之中 ……はいはい。

田之中は腕まくりしながら田んぼの中へ。

一方、すみっこに固まって話しこんでいる三姉妹。

恵 なんだと思う？ お父さんとミドリさん。

照子 なにしろ「お父さんをください！」だからねえ。

風子 あたし一生忘れないと思う。あの衝撃。

マモル 稔さん、恐れ入りますが、作業の前に稲にご挨拶をお願いします。

稔 ああ、あれか。

ミノル ……ミノルさんは、たとえばみっちゃんと呼ばれてみるのはいかがですか？

稔 ……イヤです。

ミノル そうですか。ではご唱和を…

稔 大丈夫ですよ。覚えてますから。

恵 もしかしたらミドリさん、お父さんの初恋の人で実は七十歳、なんてことないよね。

風子 まさかあ、と言い切れないうなにかがあるわね。ミドリさんには。

照子 怖い話ならやめてくれない？

風子 お姉ちゃんてほんと見かけによらず怖がりよねえ。

稔（娘たちの方に向かって手を合わせ）「よくぞここまで無事に育ってくれました。ありがとうございます。」

ミノル（みんなの様子を眺めながら）おいしいお米になったのでしょうか？

マモル 大丈夫でしょう。ヨネさんが大事に育てた子どもたちですから。

ミノル ……マモルさん。

マモル はい。

ミノル 僕たちは、がんばりましたかね？

マモル それは、ヨネさんに伺ってみないと。

暗転

## 九

十月。

マモル・ミノル・ミドリ・ユタカの四人が、ちょうどそろってアイスクャンデーを食べ終えたところ。

ミノル あー冷たかった！

マモル 体の芯から冷えました。

ミノル アイスクャンデー、最高でしょう？

ミドリ あたし……ちよつと寒いです……。

ユタカ これが最高なのは暑い時期だけだろう。

マモル もう十月ですからね。

稲村家の家族たちが、時折あちこちから姿を現す。

風子 ちよつと！ なんであの人来てるのよ！

恵 だつてかまどの使い方知ってるのお父さんだけだから。

風子 うちのかまど炊き風炊飯器で充分でしょ？

恵 でもせっかく本物があるんだし。

ミノル 僕、お米食べるの初めてですよ。

マモル 僕もです。

ミドリ 新米はね、真っ白でぴかぴか光ってますよ？

照子 なんか薪が足りないってさ。

恵 自分で取りに行つてよ。

照子 (振り向いて) 自分で取りに行けつてさ。

恵 照ちゃんに言つたんだよ？

マモル ところで、田んぼは売ってもらえることになったのですか？

ユタカ さあなあ。

稔 (火吹き竹を手に) おーい。薪が足りないんだよ。

風子 言っておくけど今日だけですからね！ ちよつとかまどでごはんが炊けるか

らつて許してもらえるなんて思わないですよ？

稔 許してもらおうなんて思つてないって、何度言つたらわかるんだ。

風子 信用できないわよ。お父さんの言うことなんて！

ユタカ あの親子、てんで話し合いにならないからなあ。

ミノル 「故郷奪還&再生プロジェクト」もお流れですね。

ユタカ ……オレ最近、組合作つたんだよ。

マモル 組合？

ユタカ 全国から出てきてるカカシたちに声かけて、オレたちだけでなにかでつか

いことやつてやろうつて計画してるんだ。

ミドリ 野心家ね、ユタカ君は。

ユタカ ところがだな、なぜか毎回最後には「いかに人間の手助けができるか」つ

て話になってるんだよ。

マモル 立派なご活動になりそうですね。

ユタカ 組合つていうよりも、ボランティア団体になっちゃうかもなあ。

恵 あれ？ 風ちゃんは？

照子 栗拾いに行った。それよりさ、火吹き係が力みすぎてズボンのお尻破いてたよ？

恵 ……あたしが縫うの？ やっぱり……。

ユタカ ……これから、みんなどうするんだ？

ミノル 僕はまず政治家になってから……。

ユタカ ……本気で言ってるの？

ミノル たくさんの人間のお願いがきけますからね。政治家になってがんばって働いて、それから文字を読めるように勉強します。

ミドリ 順番を逆にした方がいいんじゃないかしら……。

マモル 忙しくなりますね。これまで冬の間は納屋でのんびり出来たのに。

ミドリ マモルさんはどうなさるんですか？

ミノル お誘いしたんですけどね。一緒にこの国を変えませんか？

照子 ちらっと覗いただけじゃん。

稔 (モンペを履いている)「赤子泣いても蓋とるな」って言うだろう！ そんなことも知らないのかおまえは。

照子 いちいち文句言わないですよ。もうちっちゃい子どもじゃないんだから。

稔 だったら子どもみたいな真似するな！

マモル ミドリさんは、新しいお仕事がお決まりになったそうですね。

ミドリ 仕事ってほどじゃないんだけど、小学校の前で黄色い旗もってね、子どもたちが無事に道を渡れるように見守ってるんです。

ミノル ミドリさんにぴったりのお役目じゃありませんか。

ミドリ 育ってくるもの見てるって楽しいですよ？ 子どもって稲とおんなじで、毎日ちよつとずつ大きくなるから。

ユタカ ……やっぱりここを離れる気はないんだ。

恵 (ズボンを差し出し) はい。直したよ。

稔 ……恵は、お母さんに似たんだな。

恵 ……美人てこと？

稔 苦労が多そうだ。

恵 ……お父さんに言われたくないなあ……。

マモル ……人間からカカシに戻る方法というのはあるのでしょうか？

ミノル 戻る？

ユタカ 聞いたことないなあ。

ミドリ マモルさん、カカシに戻りたいんですか？

マモル いえ。そういうわけでは……。

風子 (おむすびを作りながら) ちょっとなに入れてるの!?

照子 (同じくおむすびを作りながら) これは風子のために。

風子 嬉しくないわよ！ 生の栗なんか入ってたって！

マモル ただ、もう一度田んぼの真中でじっと立っていたいような気がします。

ユタカ 朝から晩までな。

ミノル 静かなんですよね。風の音しかしなくって。

田之中 時間の経つのがゆっくりでさ。

ミドリ なつかしい。

マモル 忘れがたいです。

稲村一家がたくさんのおむすびを持って登場。

恵 おまたせしました！ 新米の塩むすびです。

風子 ひとつだけハズレが混ざってますから。

稔 なんだハズレって。

照子 当たればわかる。

恵 さあ、いただきますしよう。

風子 せーの！

一同 いただき……

ミノル 待ってください！

マモル 主役を忘れています！

マモルとミノル、駆け出したかと思うと、ヨネさんカカシを抱えて戻って来る。

マモル これで全員がお揃いです。

照子 では仕切り直してもう一度。

恵 それではみなさん。

風子 せーの！

全員による歌「忘れられランド」

お日さまが照る

風が吹く

恵みの雨が降る

忘れられランド

緑も豊か

稲穂も稔る

守るものたちが

守られるところ

歌いながら人々がそれぞれの方向へ去って行き、残った三姉妹は続けて歌う。

それでも人は忘れるけどね

忘れる気もなく忘れるからね

忘れ去られる切なさを

その胸が憶えているくせに

いつまでも忘れられないくせに

やがて三姉妹も去って行き、舞台には一人、ヨネさんのカカシだけが残される。

了